岐阜県文化財保護センター
調査報告書　第 161 集

中　切　上　野　遺　跡
（第３分冊）

２０２４
岐阜県文化財保護センター

中切上野遺跡
（第３分冊）

２０２４

岐阜県文化財保護センター

目　次（第３分冊）

第５章　総括……1
　第１節　縄文時代の集落について……1
　第２節　中切上野５号古墳及び方形周溝墓（SZ１）について……17
　第３節　土地利用の変遷について……20
引用・参考文献……21
写真図版

第１分冊目次

第１章　調査の経緯
　第１節　調査に至る経緯
　第２節　調査の方法と経過
第２章　遺跡の環境
　第１節　地理的環境
　第２節　歴史的環境
　第３節　過去の調査
第３章　調査の成果
　第１節　遺跡の基本層序
　第２節　遺構・遺物の概要
　第３節　縄文時代の遺構と遺物
報告書抄録

第２分冊目次

第３章　調査の成果
　第３節　縄文時代の遺構・遺物
　第４節　弥生時代から古墳時代の遺構・遺物
　第５節　古代の遺構・遺物
　第６節　遺構外出土遺物
　発掘区全域図分割図
　遺構一覧表
　遺物一覧表
第４章　自然科学分析
　第１節　分析の概要
　第２節　炭化樹種同定
　第３節　放射性炭素年代測定

挿図目次

図 376　遺跡の立地・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
図 377　早期・前期の遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
図 378　前期の竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
図 379　前期の主な遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
図 380　縄文土器の時期別出土分布図・・・・・・・・・・ 7
図 381　中期の遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
図 382　中期の主な遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
図 383　縄文土器の時期別出土分布図・・・・・・・・・・ 13
図 384　中切上野古墳群と周辺遺跡の立地・・・・・・ 18
図 385　弥生時代から古代の遺構・・・・・・・・・・・・・ 20

表目次

表 124　各遺跡の早期中葉から前期中葉の石器出土点数とその比率・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
表 125　各遺跡の前期後葉の石器出土点数とその比率・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

図版 41　出土遺物（11）
図版 42　出土遺物（12）
図版 43　出土遺物（13）
図版 44　出土遺物（14）
図版 45　出土遺物（15）
図版 46　出土遺物（16）
図版 47　出土遺物（17）
図版 48　出土遺物（18）
図版 49　出土遺物（19）
図版 50　出土遺物（20）
図版 51　出土遺物（21）
図版 52　出土遺物（22）
図版 53　出土遺物（23）
図版 54　出土遺物（24）
図版 55　出土遺物（25）
図版 56　出土遺物（26）
図版 57　出土遺物（27）
図版 58　出土遺物（28）
図版 59　出土遺物（29）
図版 60　出土遺物（30）
図版 61　出土遺物（31）
図版 62　出土遺物（32）
図版 63　出土遺物（33）
図版 64　出土遺物（34）
図版 65　出土遺物（35）
図版 66　出土遺物（36）
図版 67　出土遺物（37）
図版 68　出土遺物（38）
図版 69　出土遺物（39）
図版 70　出土遺物（40）
図版 71　出土遺物（41）
図版 72　出土遺物（42）
図版 73　出土遺物（43）
図版 74　出土遺物（44）
図版 75　出土遺物（45）
図版 76　出土遺物（46）
図版 77　出土遺物（47）
図版 78　出土遺物（48）
図版 79　出土遺物（49）
図版 80　出土遺物（50）
図版 81　出土遺物（51）
図版 82　出土遺物（52）
図版 83　出土遺物（53）
図版 84　出土遺物（54）
図版 85　出土遺物（55）
図版 86　出土遺物（56）
図版 87　出土遺物（57）
図版 88　出土遺物（58）
図版 89　出土遺物（59）
図版 90　出土遺物（60）
図版 91　出土遺物（61）
図版 92　出土遺物（62）
図版 93　出土遺物（63）
図版 94　出土遺物（64）
図版 95　出土遺物（65）
図版 96　出土遺物（66）
図版 97　出土遺物（67）
図版 98　出土遺物（68）
図版 99　出土遺物（69）
図版 100　出土遺物（70）
図版 101　出土遺物（71）
図版 102　出土遺物（72）
図版 103　出土遺物（73）
図版 104　出土遺物（74）
図版 105　出土遺物（75）
図版 106　出土遺物（76）
図版 107　出土遺物（77）

第５章　総括

第１節　縄文時代の集落について

今回の発掘調査では縄文時代から古代までの遺構・遺物を確認した。本稿では、遺跡の立地を確認した上で、平成８年度に高山市教育委員会によって行われた発掘調査の成果を含めて、各時期の遺構・遺物を概観し、土地利用の変遷について検討する。

１　発掘区の立地

現況地形図に調査前に実施した詳細地形測量図を合成し、平成８年度に高山市教育委員会が実施された発掘調査の発掘区（以下、「高山市発掘区」という）と当センターが実施した発掘調査の発掘区（以下、「センター発掘区」という）を図 376 に示し、各発掘区の傾斜や傾斜方向を整理した。当遺跡の立地については第２章第１節で説明したとおり、分岐した尾根との間に広がる扇状の傾斜地を中心に立地する（図４参照）。高山市発掘区は遺跡の中央部から北西部、センター発掘区は南部に位置する。高山市発掘区とセンター発掘区の西端には、平坦面から痩せ尾根となる南北方向に延びる尾根筋がある。尾根の西側には、谷があるため急傾斜になる。尾根の東部は西部に比べ傾斜が緩く、高山

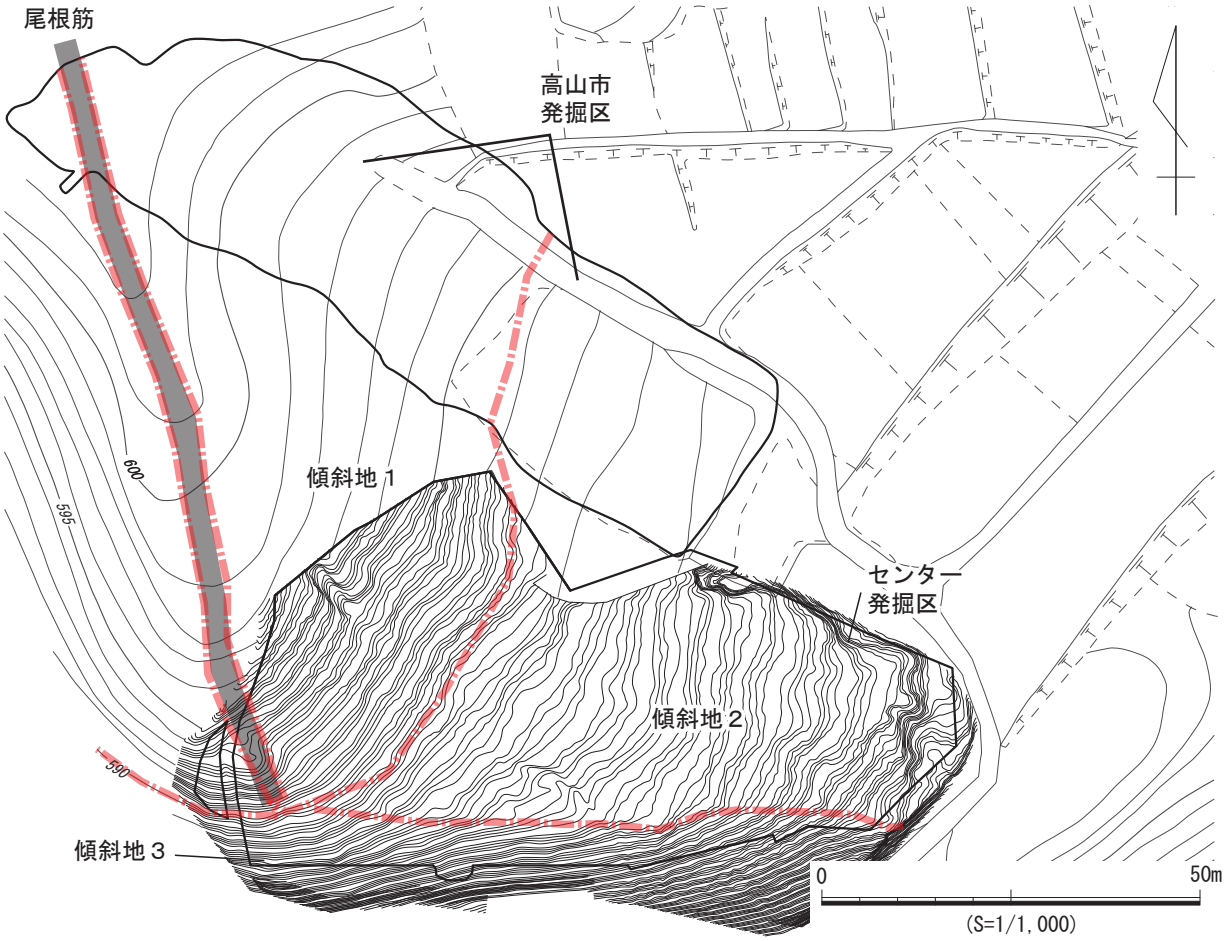


図 376　遺跡の立地

市発掘区の中央から西側とセンター発掘区の西部がそれぞれ立地する（以下、「傾斜地１」という）。傾斜地１の傾斜方向は北西から南東に下降する。高山市発掘区の南東部とセンター発掘区の中央部・東部は傾斜地１に比べさらに傾斜が緩く[1)]、傾斜方向は西から東に下降する（以下、「傾斜地２」という）。センター発掘区の南部は傾斜地１・２に比べ急傾斜で、北から南に下降する（以下、「傾斜地３）」という）。

２　各時期の様相

（１）早期

早期の遺構・遺物は少ないが、いずれも尾根筋に近い傾斜地１に立地する。センター発掘区西部で土坑墓（ST33）１基、高山市発掘区北西部で集石遺構２基を確認した。中切上野遺跡の報告書では集積遺構を早期に位置付けており[2)]、遺構内からの出土遺物がないが、遺構周辺で早期の土器が出土している。

（２）前期

①遺構について

前期の遺構は高山市発掘区とセンター発掘区全体に広がり、遺構の分布に粗密はあるものの、傾斜地１～３に立地する。竪穴建物 50 軒（高山市発掘区 15 軒、センター発掘区 35 軒）、土器埋設遺構２基（センター発掘区２基）、土坑墓 30 基（センター発掘区 30 基）のほか、土坑（高山市発掘区 12 基、

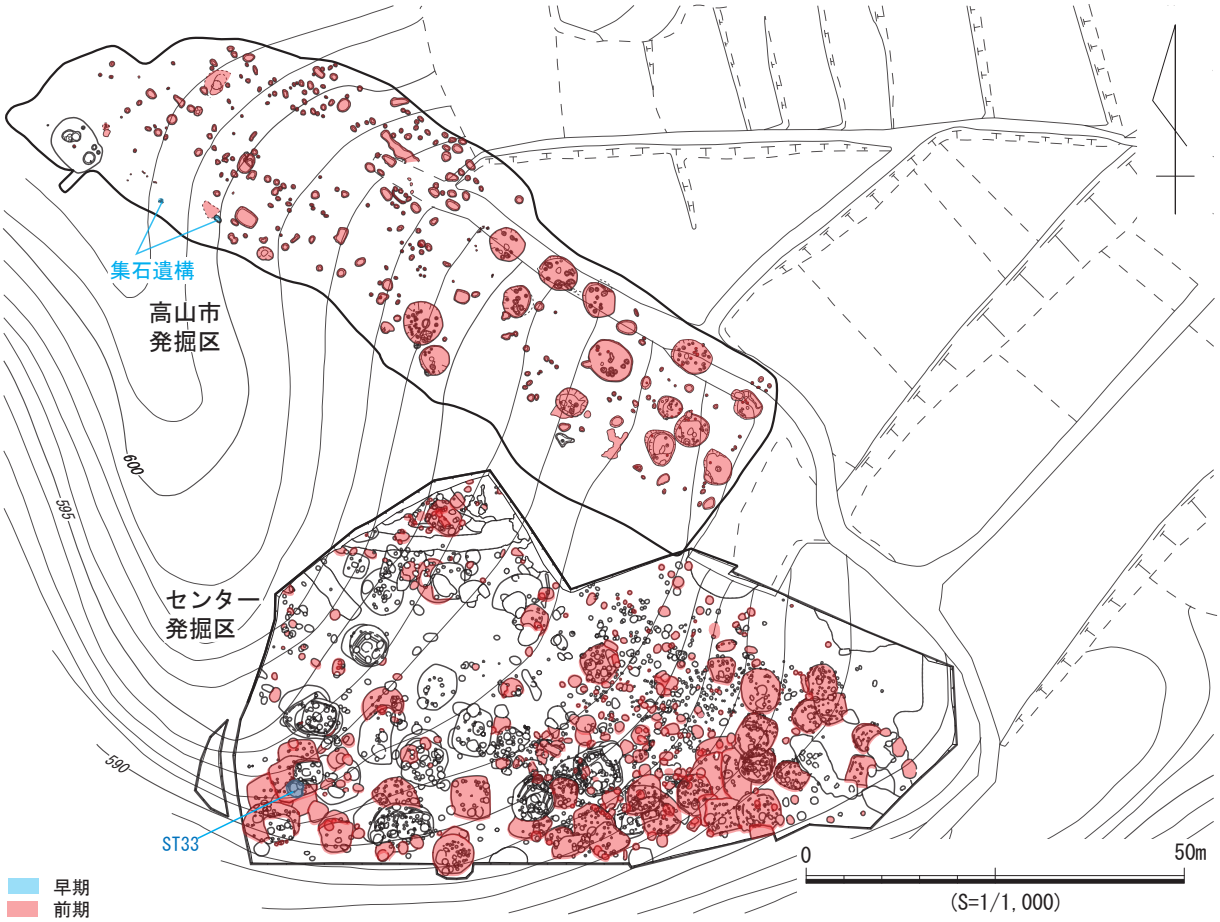


図 377　早期・前期の遺構

センター発掘区 326 基）や単独柱穴（高山市発掘区 253 基、センター発掘区 108 基）を確認した。高山市発掘区については、早期の集石遺構と中期の単独柱穴（Ｐ297）１基、飛鳥時代の竪穴建物（SB１）以外の遺構は前期の遺構と考えられているため、当該期の遺構として図示したが、センター発掘区については、時期認定ができた竪穴建物、土器埋設遺構、土坑墓、集石土坑、土坑、単独柱穴を図示した（図 377）。以下、順に各遺構の特徴や分布状況について説明する。

竪穴建物　竪穴建物はすべて後葉のもので、高山市発掘区では傾斜地２、センター発掘区の傾斜地２と３の境付近に多い。センター発掘区で確認した前期の竪穴建物[3)]のうち、竪穴建物の残存状況がよく、建物の規模や柱配置のわかる竪穴建物を図 378 に示した。竪穴建物の平面形は楕円に近い形状もあるが、不定な形状のものが多い。炉は攪乱を受け確認できなかった６軒を除き、37 軒で確認した。内訳は地床炉をもつ竪穴建物 35 軒、石囲炉をもつ竪穴建物２軒、炉をもたない竪穴建物７軒である。地床炉は浅い皿状の掘り込みをもつタイプと掘り込みがなく床面に熱により赤変のみが認められるタイプがあり、内訳は掘り込みのある地床炉をもつ竪穴建物が 13 軒(高山市発掘区 SB３・７・９、センター発掘区 SI４・11・12・14・16・17・22・28・47・54)、掘り込みがない地床炉をもつ竪穴建物が 21 軒（高山市発掘区 SB４～６・８・10～14・16、センター発掘区 SI２・７・９・10・21・23・40・43・49・53・55）、両方の地床炉をもつ竪穴建物が１軒(センター発掘区 SI42)である。この他、比較的小振りな礫を用いた石囲炉をもつ竪穴建物を２軒（高山市発掘区 SB13、センター発掘区 SI13）確認した。主柱穴は４～７本のものがあり、掘方のほぼ中央から同心円上に５・６本配置されるものが多い。貯

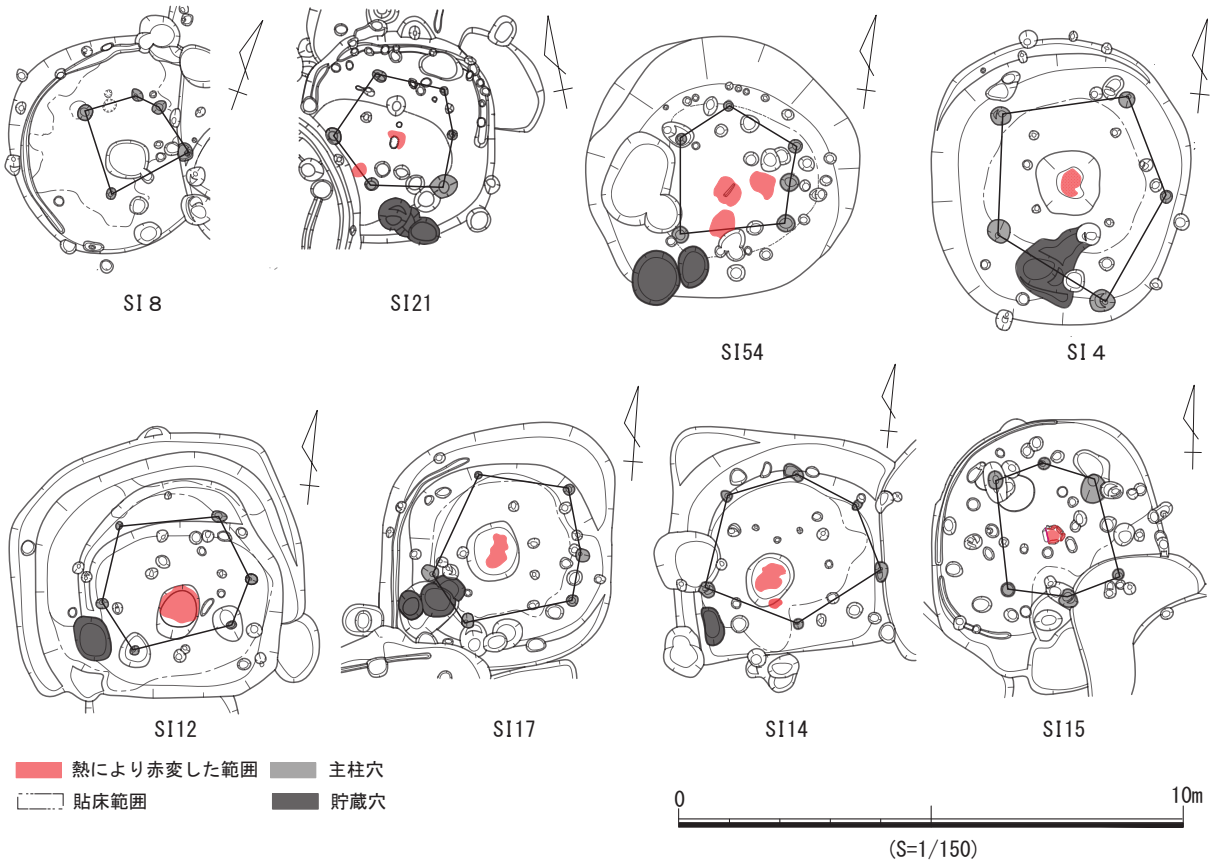


図 378　前期の竪穴建物

蔵穴は攪乱を受け確認できなかった９軒を除き、41 軒中 17 軒（高山市発掘区 SB３・８～11・15、センター発掘区 SI４・10～12・14・17・21・24・42・45・49）で確認した。貯蔵穴の位置は竪穴建物内の南部・南西部の隅や主柱穴間に設置されるものが多い。竪穴建物内に設置される貯蔵穴の事例は富山県に多いが、飛騨地域や東濃地域、愛知県山間部からも竪穴建物内に貯蔵穴の可能性がある大型の土坑が確認されている[4]ことから、富山県から愛知県山間部にかけての地域的特徴の可能性がある。

次に竪穴建物の重複関係や分布傾向を確認する。竪穴建物同士の重複は、高山市発掘区では確認されていないが、センター発掘区では傾斜地２と３の境付近で多く確認されている。竪穴建物の細別時期については本書第３章３節「２　前期の遺構」では触れていないのでここで説明する。竪穴建物の重複関係から SI３・８・13・21 が他の竪穴建物より古く位置付けられる[5]。出土土器では貯蔵穴から北白川下層Ⅱｂ式の１個体分の深鉢（414･415）が出土した SI54 と、床面検出遺構の土器が北白川下層Ⅱｂ式段階以前の土器で、埋土から出土した土器の大半が北白川下層Ⅱｂ式段階以前の土器である SI３・８・21 があり、これらが北白川下層Ⅱｂ式段階と考えられる。一方、SI13・22 を含むその他の竪穴建物は、出土土器の大半が北白川下層Ⅱｃ式段階であることから一段階新しい北白川下層Ⅱｃ式段階の竪穴建物と考えられる。高山市発掘区の竪穴建物の細別時期は、出土土器で５時期（2-1 期：諸磯ｂ式中段階、2-2 期：諸磯ｂ式中～新段階、2-3 期：諸磯ｂ式新段階、2-4 期：諸磯ｂ式新段階～諸磯ｃ式、2-5 期：諸磯ｃ式以降）に区分されている。2-1 期とした諸磯ｂ式中段階は北白川下層Ⅱｃ式段階[6]に併行すると考えられるため、センター発掘区に高山市発掘区の細別 2-1 期よりも古い段階の竪穴建物が存在することになる。図 379 に北白川下層Ⅱｂ式段階と北白川下層Ⅱｃ式段階の主要遺構の配置を示した。北白川下層Ⅱｂ式段階の竪穴建物は、センター発掘区の標高 591m以下の傾斜地２・３に SI３・８・21・54 が構築される。北白川下層Ⅱｃ式段階になると、竪穴建物は SI１・２・４～７・９～17・22・23・28・43 のように北白川下層Ⅱｂ式段階より広がり、概ね標高 591m以下の傾斜地２・３に構築され結果的に竪穴建物が重複して確認される竪穴建物群と、SI24・30・31・36・40・42・44・45・47・49・53 のように前者よりも標高の高い傾斜地２・３に構築され、一部竪穴建物の重複あるものの点在しながら確認される竪穴建物群がある。高山市発掘区の竪穴建物は図 377 のとおり傾斜地２を中心に点在する。高山市発掘区の竪穴建物は後者よりも北に位置するため別の一群とも考えられるが、後者の竪穴建物と同様に標高の高い傾斜地２に立地し、竪穴建物との重複もなく構築される状況から後者の群の一部と考えられる。

土器埋設遺構　土器埋設遺構は中葉と後葉のものを各１基ずつ確認した[7]。センター発掘区では土器埋設遺構は図 379 上図のとおり、中央より東側の傾斜地２に SJ１、SJ２が立地する。SJ１は前期中葉の有尾式の深鉢、SJ２は前期後葉の諸磯ａ式の深鉢を埋設する。土器埋設遺構の用途は不明であるが、関東地域においては前期中葉黒浜式以降に導入されたとされ、前期後半の土器埋設遺構を確認した遺跡の地理的分布は、岐阜県東濃地域・愛知県三河地域・長野県木曽地域にまとまりがあることから[8]、本遺跡で確認した土器埋設遺構は、これらの地域との関わりを窺わせる。

土坑墓　土坑墓は後葉のものを確認した[9]。センター発掘区では図 379 のとおり、土坑墓は東部の竪穴建物（SI９・11 など）よりも西側で確認されている。立地をみると、土坑墓は傾斜地２に多いが、傾斜２よりも急傾斜の傾斜地１・３にも存在する。土坑墓の時期は、細別時期を決定できる北白川下層Ⅱｃ式段階の土器がまとまって出土した ST５・16・17・23・38・42 については北白川下層Ⅱｃ式段

階のものと考えられる。この他、北白川下層Ⅱｃ式段階の土器を含まないST３・４が北白川下層Ⅱｂ式段階、これら以外の北白川下層Ⅱｃ式段階以降の土器を含まない土坑墓が北白川下層Ⅱｃ式段階の土坑墓と考えられる。時期別の分布をみると、北白川下層Ⅱｂ式段階の土坑墓はセンター発掘区の中央部やや東寄りの傾斜地２に立地する。北白川下層Ⅱｃ式段階の土坑墓は、北白川下層Ⅱｂ式段階の土坑墓よりも西側に広く立地することから、竪穴建物と同様に北白川下層Ⅱｃ式段階にセンター発掘区東部から西部へ広がったと考えられる。

前期中葉～後葉（北白川下層Ⅱｂ式期以前）

前期後葉（北白川下層Ⅱｃ式期）

図 379　前期の主な遺構

集石土坑　集石土坑は後葉のものを確認した[10]。センター発掘区では、集石土坑は東部の竪穴建物（SI９・11 など）よりも西側に 16 基分布する。集石遺構の詳細時期は出土土器からすべて北白川下層Ⅱｃ式段階と考えられる。立地をみると、集石土坑は標高 591m以下の傾斜地２に分布する。このうち、焼礫を含むものは６例（SK８・88・165・210・491・673）ある。被熱礫を伴う土坑の用途は屋外調理施設の他に葬送儀礼に関わる施設[11]と考えられており、竪穴建物や土坑墓に近い場所に位置する当該期の集落の在り方を示す資料と言える。

遺構の分布について　最後に集落での各遺構の配置について検討する。竪穴建物は、北白川下層Ⅱｂ式段階では標高 591m以下の傾斜地２・３に構築されていたが、北白川下層Ⅱｃ式段階になると北白川下層Ⅱｂ式段階と同様の概ね標高 591m以下の傾斜地２・３に構築される竪穴建物以外に、前者よりも標高の高い高山市発掘区を含む傾斜地２に構築される竪穴建物が分布するようになる。急傾斜である傾斜地３に竪穴建物が結果的に重複するように構築される理由は日照条件の良い南向きである他に、平場よりも傾斜地の方が竪穴を掘る労力が軽減される利点がある[12]ことが挙げられる。土坑墓は傾斜地２に多く竪穴建物との重複もあり、竪穴建物群の内側に環状に配置されるというよりは竪穴建物に近い位置に配置されたと考えられる。集石土坑は傾斜地２・３に多く、センター発掘区東部に集中する。集石土坑の用途が屋外調理施設である場合は、複数回使用した礫の管理を含め、一定の場所に配置する意図があるのかもしれない。以上のように集落内に竪穴建物・土坑墓があるものの、竪穴建物群と土坑墓群の分布が一部重なり合うことやセンター発掘区南部の竪穴建物群は列状に配置されることから、環状構造を示す集落にはならないと考えられる。

②遺物について

センター発掘区の遺構及び表土・包含層から出土した細別時期が特定できる接合前の土器の点数を集計し、その多寡を５段階に分け、色分けし図 380 に示した。前葉～中葉の土器はセンター発掘区東部を中心に南部や北部で出土し、特に AF16・AH18 グリッドの出土数が多い。出土土器の分布は当該期の遺構の分布（図 379 上図）と重なる部分もあるが、センター発掘区の AB９・AJ６・AK５・AK７・AK８グリッドなど遺構の分布よりも広い範囲で出土するため、後葉や中期の遺構により当該期の遺構が消滅した可能性がある。後葉の土器はセンター発掘区全体から出土し、AG16・AH15～17・AI14・AI16・AI17・AJ７・AJ14～17・AK９・AK13 グリッドで 101 点以上と出土数が多い。101 点以上出土したグリッドは竪穴建物の多い場所と重なる。AG14～AI16 グリッドは土坑墓や土坑が多い場所と重なる。一方、AF８～AF11 グリッドや AG９～AG11 グリッドなどの出土はなく、周辺グリッドでの出土数も少ない。

次に当遺跡で出土した前期後葉の石器組成と石器の特徴について、周辺遺跡の石器組成と比較し、検討する。なお、当遺跡の石器点数は、高山市発掘区の遺構出土石器点数にセンター発掘区の遺構出土石器点数を加えた数量を用いた。対象器種は 16 器種で、小林康男氏[13]や長澤有史氏[14]の論考を参考に、石器器種を機能・用途別に狩猟具（石鏃、尖頭器）、漁労具（石錘）、植物質食糧獲得・加工具Ａ（打製石斧）、植物質食糧獲得・加工具Ｂ（磨石・敲石類、石皿・台石類、砥石）・伐採具（磨製石斧）、加工具（石匙、石錐、スクレイパー、ＲＦ、ＭＦ）、その他（剥片類、石核、楔形石器）に分け、狩猟具・漁労具・植物質食糧獲得・加工具を石器組成の対象器種として検討した。なお、抽出した遺跡は、時期の特定できる竪穴建物を確認した飛騨地域の遺跡とした。ただし、早期中葉と早期後葉～前期初頭の石器組成については竪穴建物出土の石器点数が少ないことから時期の特定できる

遺構の石器数を利用した。

はじめに西田遺跡[15]・堂之上遺跡[16]の出土石器をもとに飛騨地域における早期中葉～前期中葉の遺跡の石器組成を比較する（表 124）。早期中葉では植物質食糧獲得・加工具Ｂの割合が多く、これに狩猟具が少量伴う。この時期の磨石・敲石類に特殊磨石が見られるようになる。早期後葉になると、狩猟具の割合が若干増加する。前期中葉には、漁労具の石錘と植物質食糧獲得・加工具Ｂの砥石、伐採具の磨製石斧、加工具の石匙が器種として加わる。石器組成は狩猟具の割合が増加し、植物質食糧獲得・加工具Ｂの割合が減少する。この時期の磨石・敲石類に両側辺に平坦面を持つ所謂石鹸形のものが見られるようになる。

次に飛騨地域における前期後葉の遺跡の石器組成を比較する（表 125）。村山遺跡[17]は狩猟具の次に漁労具、向畑遺跡[18]・堂之上遺跡[19]・島中通遺跡[20]は狩猟具の次に植物質食糧獲得・加工具Ｂの割合が高い。村山遺跡は宮川左岸沿いの低位段丘面上に立地する。背後には山々が広がり、段丘下は

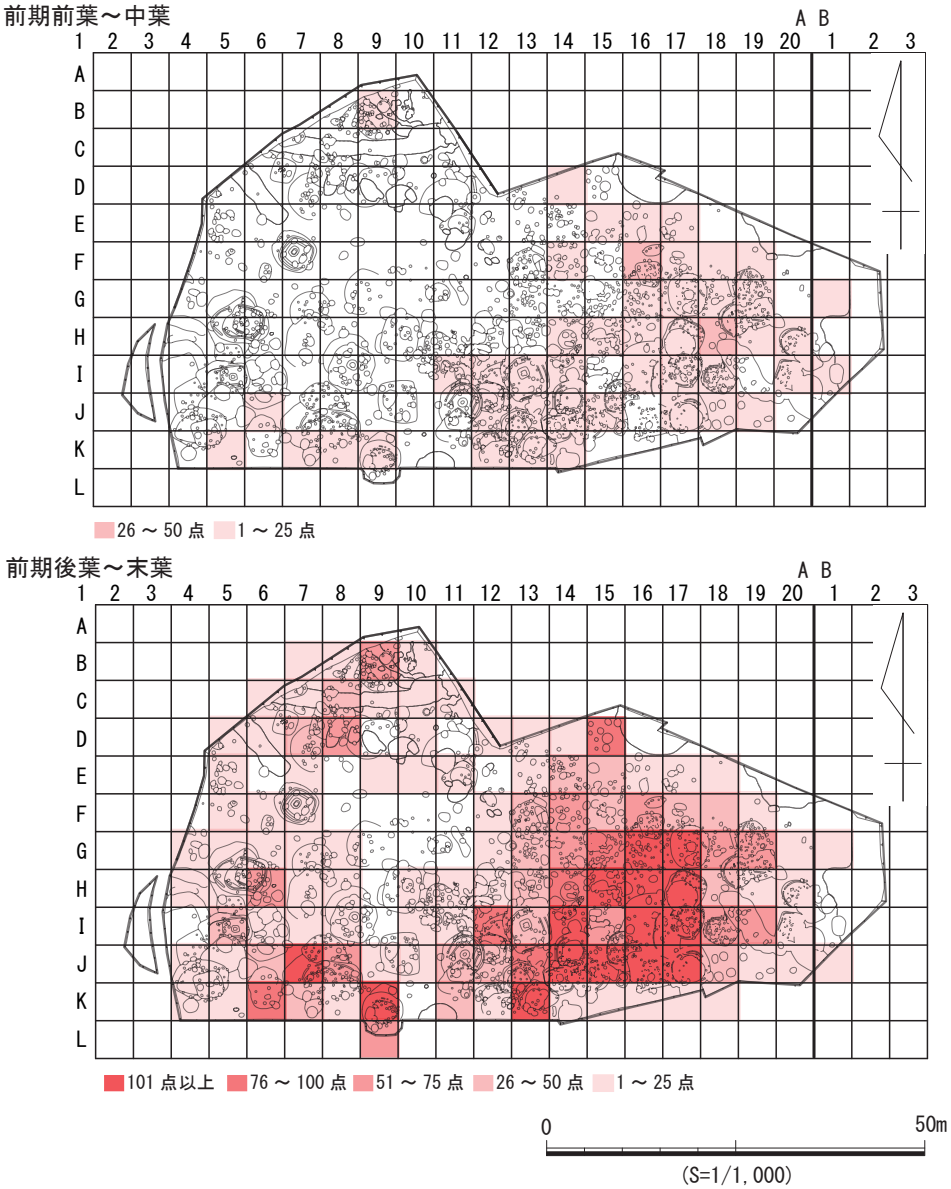


図 380　縄文土器の時期別出土分布図

川幅の広い本流が流れる。県内の遺跡でも坂祝町芦戸遺跡[21]や岐阜市御望遺跡[22]や揖斐川町上原遺跡第一地点[23]など川沿いの遺跡は石錘の割合が高い傾向にあるため、村山遺跡において漁労具の割合が高いのは近場の河川資源を積極的に獲得した結果と考えられる。一方、向畑遺跡は宮川の支流江名子川に張り出す丘陵の中位面上、堂の上遺跡は飛騨川の支流八尺川が本流との合流域に向かって張り出す舌状台地上、島中通遺跡は荘川右岸の中位段丘面上にあり、村山遺跡に比べ高位で、川幅の広い本流とは離れた場所に立地する。向畑遺跡・堂之上遺跡・島中通遺跡において狩猟具や植物質食糧獲得・加工具Ｂの割合が高いのは、食糧を背後の山々に求めた結果と考えられる。このように生業活動の比重は遺跡により異なることから遺跡の立地環境に影響を受けている可能性があると言える。

当遺跡は宮川左岸の丘陵南東斜面上で位置し、村山遺跡よりも高位で本流から離れた場所に立地する。石器組成は、同時期の遺跡と比較すると、狩猟具の割合が低く、植物質食糧獲得・加工具Ｂの割合は多い。その要因として、他の遺跡で出土することが少ない特殊磨石に似た長楕円礫の側辺に敲打痕や磨痕を残す磨石・敲石類が多いことが挙げられる。当遺跡では、このタイプの石器は磨石・敲石類の出土点数 600 点中 229 点（38.2%）と高い割合を占める。石器の側面に形成された磨面は、敲打作業を繰り返すことで敲打痕が潰れ、結果として磨面が形成されたと考えられる。当遺跡では根菜類の獲得具である打製石斧の割合が少ないことから、この石器は主に堅果類の粉砕作業に使用されたと考えられる。このことから、当遺跡で敲石・磨石類の割合が高いのは、背後の山々に堅果類などの植物質の食糧資源を求め、積極的に獲得した結果と考えられる。

表 124　各遺跡の早期中葉から前期中葉の石器出土点数とその比率

遺跡名	狩猟	漁労	植物質食糧獲得・加工				合計	伐採	加工					その他		
種類			A	B												
上段：点数 下段：比率	石鏃	石錘	打製石斧	磨石敲石類	石皿台石	砥石		磨製石斧	石匙	石錐	スクレイパー	ＲＦ	ＭＦ	剥片類	石核	楔形石器
西田 早期中葉	1	－	－	41	1	－	43	－	－	2	2	1	6	36	1	2
	2.3	－	－	95.3	2.3	－	100.0	－	－	－	－	－	－	－	－	－
西田 早期後葉～前期初頭	3	－	－	51	－	－	54	－	－	3	2	－	4	25	－	2
	5.6	－	－	94.4	－	－	100.0	－	－	－	－	－	－	－	－	－
堂之上 前期中葉	51	3	5	72	4	1	136	1	28	6	30	－	－	573	2	40
	37.5	2.2	3.7	52.9	2.9	0.7	100.0	－	－	－	－	－	－	－	－	－

表 125　各遺跡の前期後葉の石器出土点数とその比率

遺跡名	狩猟		漁労	植物質食糧獲得・加工				合計	伐採具	加工具					その他		
種類				A	B												
上段：点数 下段：比率	石鏃	尖頭器	石錘	打製石斧	磨石敲石類	石皿台石	砥石		磨製石斧	石匙	石錐	スクレイパー	ＲＦ	ＭＦ	剥片類	石核	楔形石器
中切上野 （高山市）	378	－	88	35	600	107	16	1,224	22	119	110	234	403	154	9,843	281	79
	30.9	－	7.2	2.9	49.0	8.7	1.3	100.0	－	－	－	－	－	－	－	－	－
村山 （高山市）	55	3	40	5	5	2	－	110	－	35	9	19	－	－	－	－	－
	50.0	2.7	36.4	4.5	4.5	1.8	－	100.0	－	－	－	－	－	－	－	－	－
向畑 （高山市）	46	－	2	1	15	4	0	68	3	6	10	16	0	0	154	7	－
	67.6	－	2.9	1.5	22.1	5.9	－	100.0	－	－	－	－	－	－	－	－	－
堂之上 （高山市）	33	－	4	4	10	5	1	57	－	2	2	7	－	－	139	－	14
	57.9	－	7.0	7.0	17.5	8.8	1.8	100.0	－	－	－	－	－	－	－	－	－
島中通 （白川村）	52	1	18	11	22	－	－	104	5	32	7	33	－	－	－	－	－
	50.0	1.0	17.3	10.6	21.2	－	－	100.0	－	－	－	－	－	－	－	－	－

（３）中期

①遺構について

中期の遺構は高山市発掘区では単独柱穴 1 基が確認されている。センター発掘区では西部に多く、標高 586m以上の傾斜地１・２を中心に立地する。センター発掘区では竪穴建物 20 軒、土坑墓 12 基、土器埋設遺構１基のほか、土坑 89 基や単独柱穴７基を確認した。センター発掘区の細分時期を認定できた竪穴建物、土坑墓を図 382 に示した。以下、時期毎の竪穴建物の特徴と各遺構の分布状況を確認し、集落内での配置を検討する。

竪穴建物　竪穴建物は前葉～後葉のものを 20 軒確認した。前葉の竪穴建物は３軒（SI46・50・51）である。遺構の重複関係から SI50 は SI51 より古く位置付けられる。炉は３軒ともに地床炉である。当遺跡では、前期後葉～末葉の段階で高山市発掘区の SB15 やセンター発掘区の SI15 で、石囲炉を確認したが、高山市堂之上遺跡[24]の中期初頭の 25 号住居跡や高山市ツルネ遺跡[25]の中期中葉の２号住居跡は地床炉であることから、地床炉と石囲炉が共存する時期があると考えられる。主柱穴は４本柱で平面方形の四隅に配置されると考えられ、入口土坑や対ピットは確認できなかった。

中葉の竪穴建物は７軒（SI26・29・32～35・48）確認した。SI48 では比較的小振りな礫を用い石囲いの内側の形状が多角形となる石囲炉（以下、「石囲炉Ａ」という。）と、SI32･35 では比較的大きな礫を用い石囲いの内側の形状が方形となる石囲炉（以下、「石囲炉Ｂ」という。）を確認した。主柱穴は SI29・32・35・48 が４本柱、SI26 が５本柱である。また、SI32 で入口土坑、SI35 で入口土坑と対ピットを確認したが埋甕は確認できなかった。

後葉の竪穴建物は 10 軒（SI18～20・25・27・37～39・41・52）確認した。SI52 は石囲炉Ａ、これ以外は石囲炉Ｂであった。主柱穴は SI20・39 が不明以外、４本柱で平面方形の四隅に配置されると考えられる。SI18・19・25・41 で入口の対ピット、SI20・37～39 以外で入口土坑を確認したが、埋甕は確認できなかった。

土坑墓　土坑墓は前葉～後葉のものを 12 基確認した。内訳は前葉１基（ST14）、中葉４基（ST13・19・43・46）、後葉３基（ST32・34・37）、詳細時期不明４基（ST22・24・35・40）である。前葉は傾斜地２、中葉は傾斜地１・２、後葉は傾斜地１に立地する。

遺構の分布について　次に集落での各遺構の配置について検討する。図 382 に各時期の竪穴建物と土坑墓の位置を図示した。また、石囲炉や入口土坑から竪穴建物の出入口が明確なものは矢印で示した。

前葉では地床炉をもつ竪穴建物がセンター発掘区西部南寄りの標高 590m前後の傾斜地２と３の境付近に３軒（SI46・50・51）、土坑墓は竪穴建物と離れた東部の傾斜地２に１基（ST14）分布する。ＳＴ14 付近は出土遺物も少なく、竪穴建物との関係性は不明である。

中葉になると、石囲炉Ａをもつ竪穴建物（SI48）がセンター発掘区中央部南寄りの標高 590m前後の傾斜地２と３の境付近に分布し、これとは別に石囲炉Ｂをもつ竪穴建物（SI32･35）や SI26・29 がセンター発掘区西部の標高 593m～596mにかけての傾斜地１に分布する。これが、どのような性格の違いに起因しているかは不明である。土坑墓は ST19 が傾斜地１に立地する以外、SI48 周辺の傾斜地２に分布し、竪穴建物と同様に２つのブロックに分かれる。同時共存であればそれぞれの竪穴建物のブロックに属する可能性が高い。

後葉になると、中葉に引き続き、石囲炉Ａをもつ竪穴建物（SI52）がセンター発掘区中央南西寄り

の標高 591～592mの傾斜地２に、センター発掘区西部の傾斜地１に石囲炉Ｂをもつ竪穴建物（SI25･27･41）が分布するが、新たにセンター発掘区南部の傾斜地２と３の境付近に石囲炉Ｂをもつ竪穴建物（SI18～20）が分布する。また、SI52 に近い位置に炉や入口土坑を持たない竪穴建物(SI37～39)が分布するが、どのような性格の違いに起因しているかは不明である。土坑墓はセンター発掘区西部南寄りの SI52 と SI41 の間に分布する。

以上のように中期の遺構の分布は前期後葉の遺構の分布と比べ、竪穴建物や土坑墓の分布範囲も狭くなり、竪穴建物と土坑墓の分布はブロック単位に配置されることから、高山市垣内遺跡のような環状構造を示す集落ではなく、高山市赤保木遺跡[26]や戸田哲也氏が指摘する高山市岩垣内遺跡や飛騨市中野山越遺跡のような地形に合わせた集落[27]であったと考えられる。

②遺物について

センター発掘区の遺構及び表土・包含層から出土した細別時期が特定できる接合前の土器の点数を集計し、その多寡を５段階に分け、色分けし図 383 に示した。前葉の土器は AJ７グリッドの出土数が多い。AJ４～AK５・AJ7～AK８グリッドなど竪穴建物の分布（図 382 上段）と重なる。遺構を確認できなかった AB８・AC９・AC10 グリッドの出土は大きな溝状の攪乱が多数あるため、これらの影響により当該期の遺構が消滅した可能性もある。中葉はセンター発掘区西部を中心に広く出土し、AD７グリッド・AH６グリッド・AJ11 グリッドの出土数が多い。AD７～9・AF６・AF７・AG５～AH6・AI11～AJ12 グリッドなど竪穴建物の分布（図 382 中段）と重なる。後葉は AJ11 グリッドの出土数が多い。AD７・AD

図 381　中期の遺構

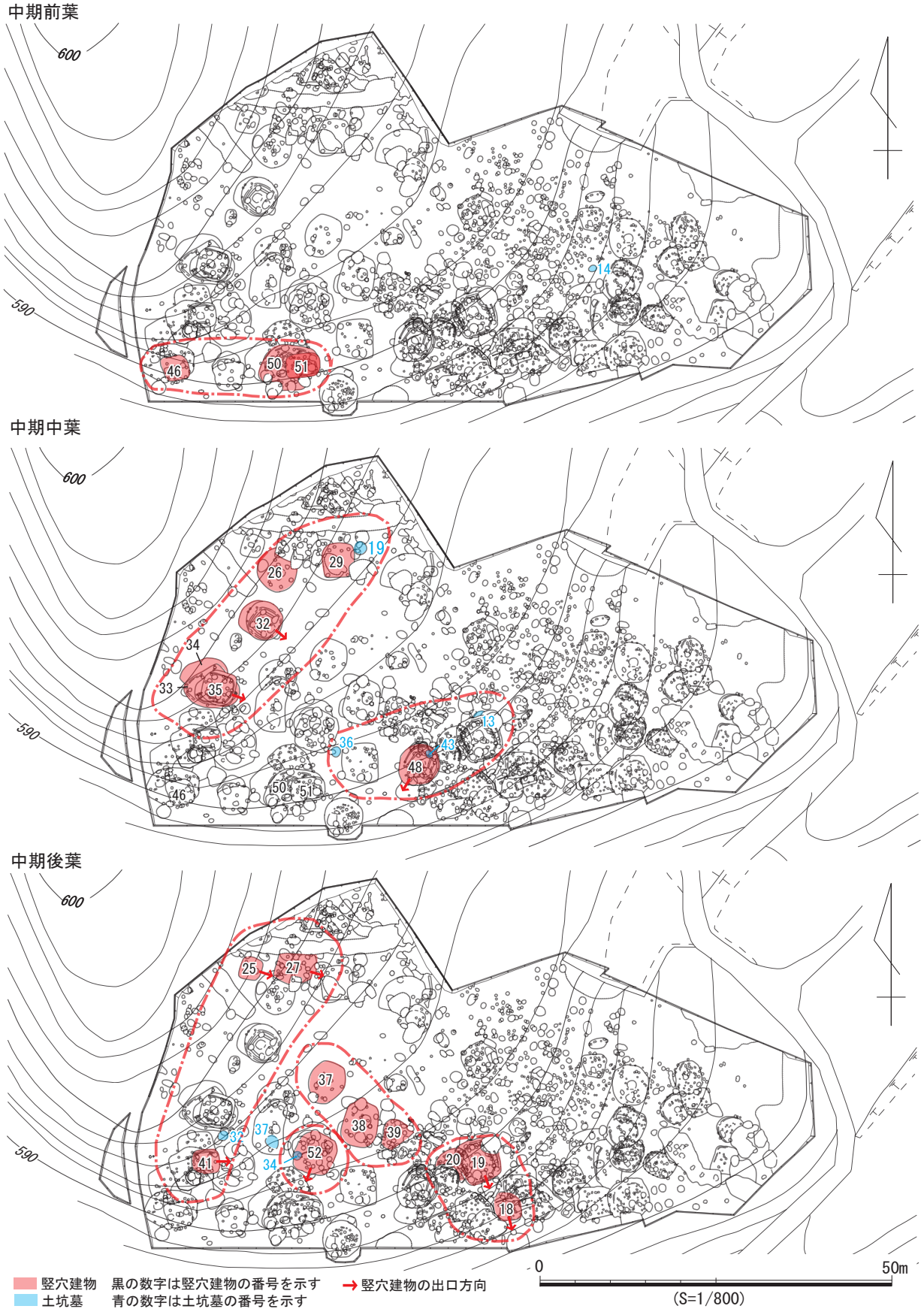


図 382　中期の主な遺構

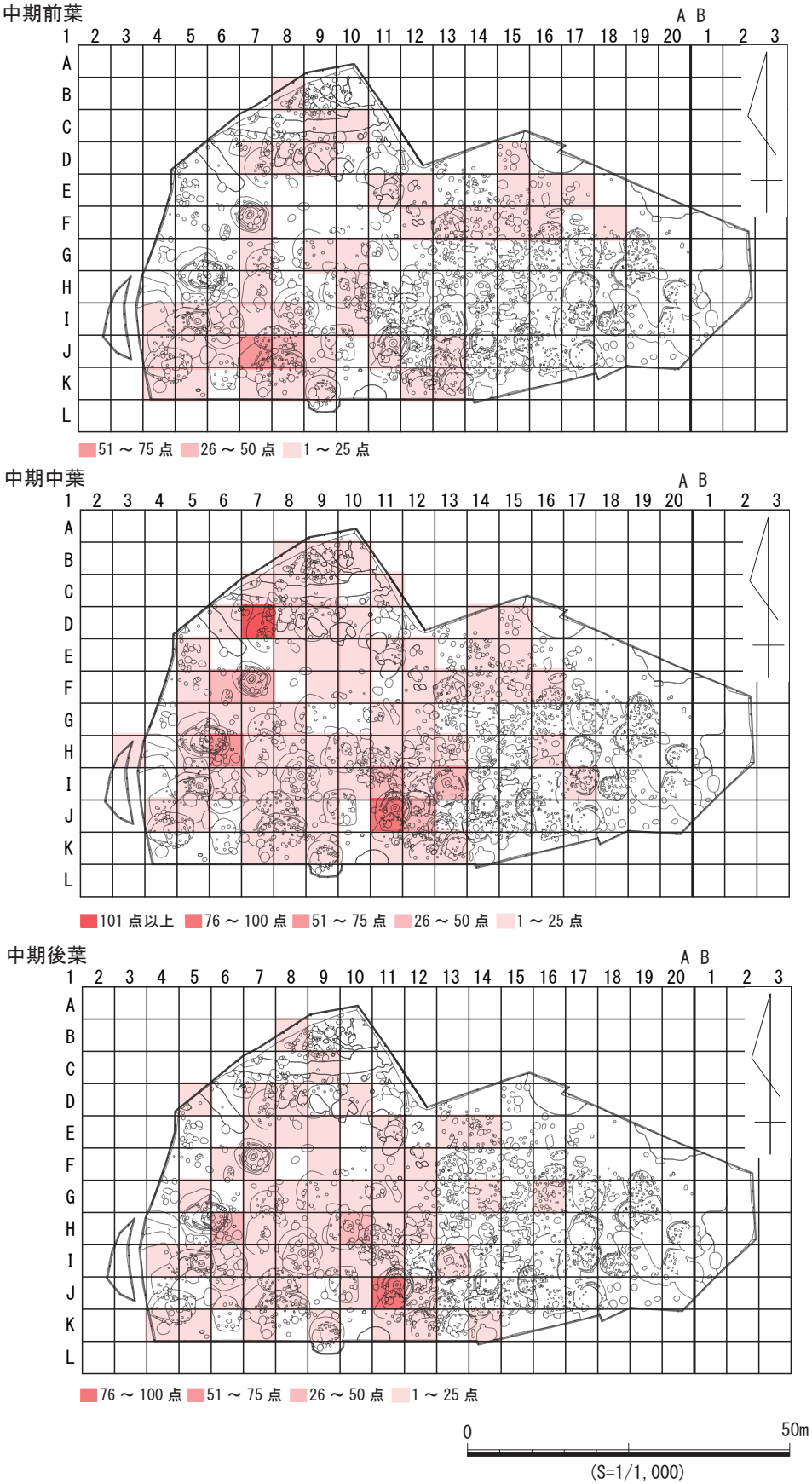


図 383　縄文土器の時期別出土分布図

８・AF９・AG８・AG９・AH８～AI11・AI13 グリッドなど竪穴建物の分布（図 382 下段）と重なる。次に当遺跡で出土した中期の石器組成と石器の特徴について、周辺遺跡の石器組成と比較し、検討する。なお、当遺跡の石器点数は（２）②と同様の方法で集計し、各遺跡の石器点数は、竪穴建物から出土した石器の数量[28]を用いた。

当遺跡の石器組成は前葉では狩猟具や植物質食糧獲得・加工具Ｂが高い割合を示す（表 126）。中葉以降、当遺跡は狩猟具の割合が減少し、植物質食糧獲得・加工具Ａの割合は徐々に高くなり、植物質食糧獲得・加工具Ｂ、植物質食糧獲得・加工具Ａの順に高い割合を示すようになる。堂之上遺跡は初頭では狩猟具や植物質食糧獲得・加工具Ｂが高い割合を示すが、中葉では植物質食糧獲得・加工具Ａの割合が増加し、後葉以降、植物質食糧獲得・加工具Ａの割合が増加する。赤保木遺跡は植物質食糧獲得・加工具Ｂ、狩猟具、植物質食糧獲得・加工具Ａの順に高い割合を示す。上岩野遺跡は中期中葉では狩猟具が高い割合を示すが、中期後葉では植物質食糧獲得・加工具Ａの割合が増加する。垣内遺跡では集落開始期の中葉から植物質食糧獲得・加工具Ａは高い割合を示す。

表 126　各遺跡の中期から後期の石器出土点数とその比率

遺跡名	狩猟	漁労	植物質食糧獲得・加工				合計	伐採	加工					その他		
種類			A	B												
上段：点数 下段：比率	石鏃	石錘	打製石斧	磨石敲石類	石皿台石	砥石		磨製石斧	石匙	石錐	スクレイパー	ＲＦ	ＭＦ	剥片類	石核	楔形石器
中切上野 中期前葉	11	1	3	10	5	－	30	1	5	4	4	50	25	121	13	－
	36.7	3.3	10.0	33.3	16.7	－	100.0	－	－	－	－	－	－	－	－	－
中切上野 中期中葉	8	5	11	40	12	－	76	4	2	2	6	35	12	85	6	－
	10.5	6.6	14.5	52.6	15.8	－	100.0	－	－	－	－	－	－	－	－	－
中切上野 中期後葉	13	10	16	40	10	－	89	5	3	5	12	44	29	180	10	－
	14.6	11.2	18.0	44.9	11.2	－	100.0	－	－	－	－	－	－	－	－	－
堂之上 中期初頭	33	11	6	14	2	－	66	2	3	11	34	－	－	526	1	34
	50.0	16.7	9.1	21.2	3.0	－	100.0	－	－	－	－	－	－	－	－	－
堂之上 中期中葉	41	5	8	46	5	－	105	3	10	11	45	－	－	377	5	41
	39.0	4.8	7.6	43.8	4.8	－	100.0	－	－	－	－	－	－	－	－	－
堂之上 中期後葉	114	10	40	78	7	1	250	11	10	8	71	－	－	766	5	65
	45.6	4.0	16.0	31.2	2.8	0.4	100.0	－	－	－	－	－	－	－	－	－
堂之上 中期末葉	80	13	48	153	21	5	320	31	14	14	30	0	0	723	3	70
	25.0	4.1	15.0	47.8	6.6	1.6	100.0	－	－	－	－	－	－	－	－	－
赤保木 中期	130	9	62	152	3	2	358	41	9	34	26	39	24	3,164	8	19
	36.3	2.5	17.3	42.5	0.8	0.6	100.0	－	－	－	－	－	－	－	－	－
上岩野 中期中葉	40	2	3	12	1	2	60	9	6	14	5	6	7	485	2	7
	66.7	3.3	5.0	20.0	1.7	3.3	100.0	－	－	－	－	－	－	－	－	－
上岩野 中期後葉	403	40	222	161	16	3	845	104	9	132	94	102	108	9,290	25	68
	47.7	4.7	26.3	19.1	1.9	0.4	100.0	－	－	－	－	－	－	－	－	－
上岩野 後期前葉	207	20	92	82	8	3	412	51	2	61	20	38	87	3,712	23	92
	50.2	4.9	22.3	19.9	1.9	0.7	100.0	－	－	－	－	－	－	－	－	－
垣内 中期中葉	5	2	35	18	1	0	61	7	3	1	0	0	4	46	5	0
	8.2	3.3	57.4	29.5	1.6	0.0	100.0	－	－	－	－	－	－	－	－	－
垣内 中期後葉	15	12	48	45	6	1	127	28	2	4	0	0	12	154	17	0
	11.8	9.4	37.8	35.4	4.7	0.8	100.0	－	－	－	－	－	－	－	－	－
垣内 後期前葉	13	20	54	59	3	2	151	28	0	1	0	0	3	136	16	0
	8.6	13.2	35.8	39.1	2.0	1.3	100.0	－	－	－	－	－	－	－	－	－
垣内 後期中葉	34	26	66	64	8	3	201	24	2	15	0	0	8	390	36	0
	16.9	12.9	32.8	31.8	4.0	1.5	100.0	－	－	－	－	－	－	－	－	－

以上のように中期の遺跡の石器組成は前期の遺跡の石器組成（表 125）と比べ、植物質食糧獲得・加工具Ａが一定量の割合でみられるようになる。また、中葉から後葉にかけて植物質食糧獲得・加工具Ａの割合が増加する傾向にあり、根茎類の利用が高かったと考えられる。特に上岩野遺跡や垣内遺跡は、当遺跡や堂之上遺跡・赤保木遺跡に比べ植物質食糧獲得・加工具Ａは高い割合を示し、中期後葉以降、打製石斧の出土点数が磨石・敲石類の出土点数に拮抗するか上回る。長屋幸二氏によれば、飛騨地域は中期後半になると、打製石斧がほとんどの遺跡で出土するようになり、東濃・奥三河と比べ磨石・敲石類が多く出土する点に大きな違いがあると指摘している。また、この違いについて、磨石・敲石類が灰汁や有害成分や繊維をとり除き澱粉を抽出する必要がある根茎類（クズ・ワラビ・カタクリ・ウバユリ）に叩き潰しに用いられた可能性を言及している[29]。上岩野遺跡は牧谷川右岸の段丘地及び丘陵の緩斜面に立地しているが、背後に緩やかで広大な傾斜地、東側に段丘面が広がる。垣内遺跡においても「上野平」と呼ばれる広大な大地の平坦面に立地しており、積極的に根茎類採集を生業に取り入れたと考えられる。

一方、当遺跡や堂之上遺跡・赤保木遺跡は中期に集落が終焉を迎えるが、上岩野遺跡や垣内遺跡では後期まで集落が存続することを踏まえると、飛騨地域の縄文時代の集落は、中期中葉から後葉にかけて根茎類などの食糧資源を生業として積極的に行うようになり、後期以降、集落の立地も根茎類などの食糧資源を獲得しやすい平坦地や丘陵に変化していったと考えられる。

注

１）高山市が実施した中切上野遺跡の発掘調査報告書では、高山市発掘区の北西部は、両側の尾根が挟まってできた扇頂部にあり、高山市発掘区東部よりも急傾斜とされている。

高山市教育委員会 1999『中切上野遺跡発掘調査報告書』の 49 頁

２）高山市が実施した中切上野遺跡の発掘調査報告書では、焼礫遺構は遺構周辺で早期の遺物が出土したことや遺構の形態から早期の遺構と判断している。

高山市教育委員会 1999『中切上野遺跡発掘調査報告書』

３）高山市発掘区では、竪穴建物の柱配置や貯蔵穴が不明なものが多いため、センター発掘区の竪穴建物のみを図示した。

４）平岡遺跡の報告書の中で、平岡遺跡や吉峰遺跡の各建物に貯蔵穴が伴う構造は、当地域の特色の一つとしている。また、大石崇史氏は飛騨地域においても竪穴建物に伴う大型の土坑が多く見つかっており、これらは貯蔵穴の可能性があることを指摘している。この他、建物に貯蔵穴が伴う事例は、東濃地域では中津川市落合五郎遺跡、愛知県の山間部では設楽郡ヒロノ遺跡がある。

金三津道子 2015「第Ⅳ章総括　１平岡遺跡の集落構造」『平岡遺跡』の 325～326 頁、公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

大石崇史 2016「第１節　縄文時代前期ってどんな時代」『高山市史　先史時代から古代遍（上）』の 119 頁、高山市教育委員会

河野典夫「第４章　遺構」『落合五郎遺跡』中津川市教育委員会

増子康眞 2001「愛知県における縄文時代集落の諸様相」『列島における縄文時代集落の諸様相』、縄文文化研究会

５）竪穴建物同士の重複はSI１＞SI２＞SＩ３、SI11＞SI９＞SI８、SI11＞SI９＞SI13、SI12＞SI14＞SI13、SI28＞SI23＞SI22の５箇所ある。

６）馬場伸一郎氏は、以下の文献で 2-1 期とした諸磯ｂ式中段階の竪穴建物の SB13 を北白川下層Ⅱｃ式新段階としている。本書では馬場氏の土器編年対応表を参考に、北白川下層Ⅱａ式を諸磯ａ式古段階、北白川下層Ⅱｂ式を諸磯ａ式新段階、北白川下層Ⅱｃ式を諸磯ｂ・ｃ式に対応させ、説明する。

馬場伸一郎 2012「縄文時代前期後半飛騨を中心とした地域間交流」『縄文・峰一合遺跡の再検討』の 10 頁表１、下呂市教育委員会・下呂ふるさと歴史記念館

７）高山市発掘区では、センター発掘区で行った土坑の詳細な分類が行われておらず、明確な記載がないため、以下の分析から除外した。

８）長田友也 2011「第３節　水汲遺跡の位置づけ　Ｂ.埋設土器」『水汲遺跡』の 244 頁、豊田市教育委員会

長田友也氏 2012「東海地方における峰一合遺跡」『縄文・峰一合遺跡の再検討』の 35 頁、下呂市教育委員会・下呂ふるさと歴史記念館

９）高山市発掘区では、センター発掘区で行った土坑の詳細な分類が行われておらず、明確な記載がないため、以下の分析から除外した。ただし、前掲１）の報告書中 106 頁で高山市発掘区の土坑やピットは土坑墓や貯蔵穴の可能性があるとされている。

10）高山市発掘区では、センター発掘区で行った土坑の詳細な分類が行われておらず、明確な記載がないため、以下の分析から除外した。

11）谷口康浩氏は被熱による用礫の変色・破砕が軽少かほとんど認められない施設の事例として長野県阿久遺跡の集石遺構を挙げ、特別な機会に際してのみ供用された一回性の強い一群として、儀礼的・形式的炊饗が行われた可能性を指摘している。

谷口康弘 1986「縄文時代「集石遺構」に関する試論」『東京考古４』、東京考古談話会

12）下記の文献で、山際の傾斜地に中期の竪穴建物を築く理由について、深い竪穴を半分の労力で掘ることができることを挙げている。

財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2005『上岩野遺跡』（岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書第 90 集）の本文編 190 頁

13）小林康男 1995「組成論」『縄文文化の研究７　道具と技術』、雄山閣出版株式会社

14）長澤有史 2011「第２節水汲遺跡出土石器群の石器組成について」『水汲遺跡　第２・３・５・６次調査』、豊田市教育委員会

15）下記の文献の第 11 表「遺構別石器一覧表」をもとに早期中葉の遺構と早期後葉～前期初頭の遺構で出土した石器点数を集計し、表中に示した。

久々野町教育委員会 1997『堂之上遺跡　縄文時代集落跡の調査記録』

16）下記の文献の神之木式並行段階の竪穴建物５軒（７・13・17・18・40）、有尾式・黒浜式並行段階の竪穴建物２軒（７・43）で出土した石器点数を集計し、表中に示した。

財団法人岐阜文化財保護センター1997『西田遺跡』（岐阜県文化財保護センター調査報告書第 29 集）

17）下記の文献の竪穴建物１軒（立穴住居跡）で出土した石器点数を集計し、表中に示した。

塩屋雅夫・大野政雄 1960『村山遺跡』

18）下記の文献の前期後葉の竪穴建物５軒（２・５・７・11・13）で出土した石器点数を集計し、表中に示した。

高山市教育委員会 1982『向畑遺跡発掘調査報告書』

19）前掲注 12）の文献の前期後葉の竪穴建物２軒（15・28）で出土した石器点数を集計し、表中に示した。

20）島中通遺跡は遺構毎の石器出土点数は不明であるが、前期の単独時期の遺跡であることや下記の文献で石器の大部分が竪穴

建物の覆土から出土したと記載されていることから、遺構及び遺物包含層で出土した石器点数を表中に示した。

白川村教育委員会 1983『島中通遺跡発掘調査報告書』

21）坂祝町教育委員会 1988『芦戸遺跡」

22）内堀信雄 1985「第４章　遺物１（石器）」『御望遺跡』（市道西郷１号線建設に係る緊急発掘調査の記録）、岐阜市教育委員会

岐阜県文化財保護センター2020『御望Ａ遺跡』（岐阜県文化財保護センター調査報告書第 144 集）

23）岐阜県文化財保護センター2000『上原遺跡Ⅱ』（岐阜県文化財保護センター調査報告書第 54 集）

24）前掲注 12 の文献

25）高山市教育委員会 1978『ツルネ遺跡』

26）下記の文献の総括では、遺跡全体の様相をほぼすべて把握できたという理由から、赤保木遺跡は遺跡の中央に広場や土坑群を配する大規模な集落跡ではないことを確定できたと述べている。

財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター『赤保木野遺跡』（岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書第 105 集）

27）戸田哲也氏は下記の文献で、岩垣内遺跡の中期後葉の竪穴建物群を抽出し図化し、斜面地の崖線に並行して列状分布になること、中野山越遺跡は中期中～後葉は傾斜に合わせて帯状分布になることを指摘している。

戸田哲也 2001「岐阜県における縄文時代集落の諸様相」『列島における縄文時代集落の諸様相』、縄文文化研究会

28）堂之上遺跡は前掲注 15）の文献で中期初頭の竪穴建物１軒（25）、中期中葉の竪穴建物７軒（22・30・33・35・36・37・41）、中期後葉の竪穴建物９軒（１・４・６・14・23・26・27・38・42）、中期末葉の竪穴建物 16 軒（２・３・５・８～10・12・16・19～21・24・29・32・34・39）で出土した石器点数をそれぞれ集計し、表中に示した。

赤保木遺跡については遺構毎の出土点数が不明であるため、前掲注 23）の文献で遺構及び遺物包含層の出土した石器点数を集計し、表中に示した。

上岩野遺跡は前掲注 12）の文献で中期中葉の竪穴建物３軒（12・17・44）、中期後葉の竪穴建物 52 軒（１～３・５～７・９・10・15・16・18～21・24・26～33・35～39・41～43・45・48～52・54・55・57・59～61・64・68～70・72・74・76～78）、後期前葉の竪穴建物 15 軒（８・13・14・22・23・25・34・40・46・56・58・62・63・67・75）で出土した石器点数をそれぞれ集計し、表中に示した。

垣内遺跡は下記の文献で中期中葉の竪穴建物５軒（13・32）、中期後葉の竪穴建物７軒（４・６・15・18・21・35・50）、後期前葉の竪穴建物５軒（５・７・19・27・34）、後期中葉４軒（46・51・61・63）で出土した石器点数をそれぞれ集計し、表中に示した。

高山市教育委員会 1991『垣内遺跡発掘調査報告書』

29）長屋幸二 2003「東海・関西地域における打製石斧の選択」『縄文時代の石器Ⅱ－関西の縄文前期・中期』関西縄文研究会

第２節　中切上野５号古墳及び方形周溝墓（SZ１）について

今回の発掘調査では中切上野５号古墳及び方形周溝墓（以下、「SZ１」と記載する）を検出した（第３章第４節）。以下に、中切上野５号古墳と SZ１の属性を説明し、地域における歴史的意義づけについて検討する。

１　墳墓の規模・形態

飛騨地域（高山市・飛騨市・下呂市・白川村を含む範囲）では、上切寺尾古墳群[1)]・中野大洞平遺跡[2)]・上町遺跡[3)]・ツルネ遺跡[4)]などで墳墓・周溝墓が確認されている。また、中切上野古墳群内の中切上野１号古墳では当センターが令和元年度に発掘調査を実施し[5)]、墳丘盛土や周溝を確認した。今回の調査で確認した中切上野５号古墳でも墳丘盛土・周溝が残存しており、中切上野１号古墳と同様に、残存状況が良好な墳墓といえる。

中切上野５号古墳の方台部は、平面形が方形になるよう区画した構造をもつ。方台部の規模は、東西方向の規模が一辺約８ｍあり、中切上野１号古墳に隣接する場所で検出した方形周溝墓（SZ２）の規模に近い値を示す。周溝の西溝と傾斜地下方側の南溝が認められないことが方台部が立ち上がりが認められることから、削りだした状態になっている。SZ１方台部の平面形は、内周が直線に近い。方台部の規模は、内周規模が約７ｍであり、中切上野５号古墳や中切上野１号古墳に隣接する場所で発見した方形周溝墓（SZ２）の規模よりもやや小さい。上切寺尾古墳群では、斜面下方に周溝が認められない墳墓は丘陵の斜面に立地することから同様の特徴をもつ。

２　墳丘の構築と主体部について

中切上野５号古墳の墳丘盛土は、旧表土や基盤層に由来すると考えられ、周溝掘削により生じた排土を構築土として利用した可能性が高い。墳丘の構築方法は、周溝掘削により生じた排土を方台部の周縁に堤状の盛土を行った上でその内部を充填するもので、傾斜地上方に周溝を掘削しつつ、方台部内の傾斜地下方に盛土（６層～９層）を置き、最後に傾斜地下方の堤状の盛土（５層）の内側に盛土するという連続した工程を示している可能性がある。また、墳丘下の調査では北側の周溝と長軸が類似する掘り込み（SD２）を確認した。周溝よりも方台部側の墳丘盛土下で検出したことから墳丘構築当初に掘削された周溝の名残と考えられ、その後、中切上野５号古墳の規格が変更されたことに伴い埋め戻されたと考えられる。主体部は１基あり、長軸方位は墳墓の長軸方位と並行し、主体部の底面が旧表土まで達する。

SZ１の墳丘は確認できなかった。主体部は２基あり、長軸方位は墳墓の長軸方位とは合わない。

３　出土遺物

今回検出した中切上野５号古墳では縄文土器以外の土器が出土していないため、中切上野５号古墳の造営時期を特定できない。SZ１は周溝底面付近で土器が出土しており、溝が次第に埋没する段階の資料と考えられる。土器の器種は壺で、古墳時代初頭のものである。

４　中切上野古墳群について

今回の発掘調査で確認した中切上野５号古墳と SZ１は約 50m離れている。発掘調査時において他には墳丘や周溝は確認できなかったことから、墳墓（周溝墓）の立地に空閑地が存在したと考えられる。

SZ１は出土遺物から中切上野１号古墳や中切上野１号古墳に隣接する方形周溝墓（SZ２）と同じ古墳時代初頭以降に構築されたと考えられるが、他の周溝墓・墳墓との周溝の重複は認められなかった。また、中切上野５号古墳は出土遺物がなく時期が特定できないが、他の周溝墓・墳墓との周溝の重複は認められなかった。中切上野１号古墳の調査時に確認した方形周溝墓（SZ２）は、周溝同士の重複が認められたが、上切寺尾古墳群の尾根上に展開する墳墓のように周溝を共有しながら墳墓が並ぶのではなく、周溝の一部が重複したように見える。中切上野古墳群で検出した中切上野１号古墳・中切上野５号古墳・SZ１・SZ２は、上切寺尾古墳群の斜面下方に展開する墳墓のように、区画を共有するという意識は低く、傾斜を意識した向きで墳墓の方向が揃い、密集度は低いものと考えられる。

最後に中切上野古墳群が生み出された背景について考察する。中切上野古墳群から見下ろす位置には緩傾斜地があり、ここに中切日焼遺跡と中切遺跡が立地している。中切日焼遺跡は令和元年度に遺跡の一部で発掘調査したが、墳墓と対応する時期の集落跡は確認できなかった[6)]。このため、当古墳

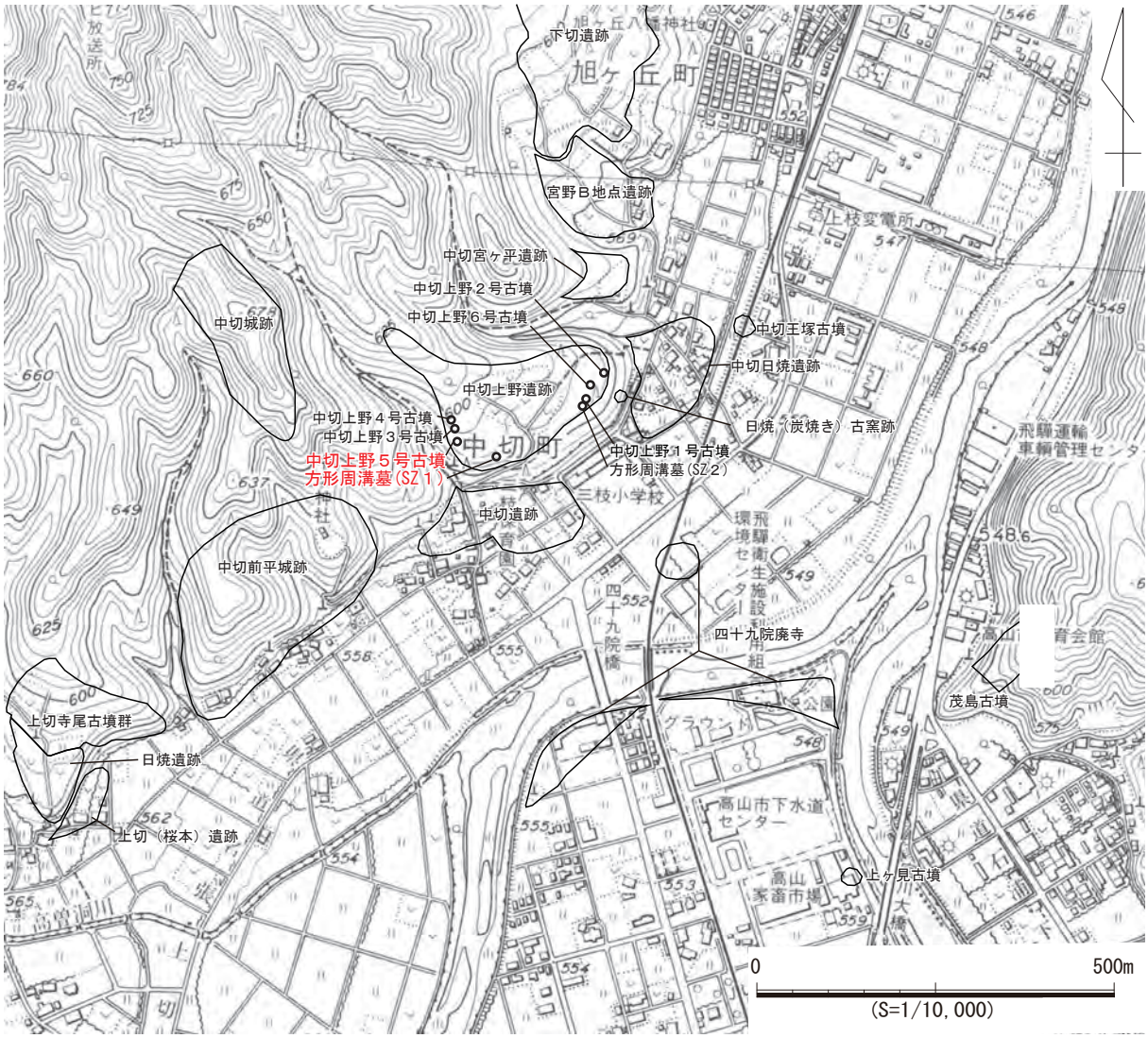


図 384　中切上野古墳群と周辺遺跡の立地

高山市役所発行１万分の１市街図　平成４年「高山市市街図其一」を使用。

群の造墓集団について現段階では不明である。上切寺尾古墳群に関しては、高曽洞川の谷を挟む離れた野内遺跡で弥生時代後期後半～古墳時代初めの集落[7]が確認されていることから、造墓集団の居住域が隣接しないことも推定されている。一方、中切上野古墳群の周辺では、中切日焼遺跡で縄文時代晩期の土器や御物石器が採集されている[8]ことや５世紀代の古墳である中切王塚古墳が築造されていることから、中切日焼遺跡から中切王塚古墳の間は比較的安定した土地と考えられる。そのため、令和元年度では確認できなかったが、居住域は中切日焼遺跡が立地する周辺の緩斜面にあった可能性を考えたい。今後は、飛騨地域における当時の集落と墳墓群の関係の明らかにすることが課題と思われる。

注

1)岐阜県文化財保護センター2020『上切寺尾古墳群・日焼遺跡』

2)財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2006『西ヶ洞廃寺跡・中野山越遺跡・中野大洞平遺跡・大洞平５号古墳』
財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『中野大洞平遺跡Ⅱ』

3)古川町教育委員会 1991『上町遺跡Ｄ地点発掘調査報告書』

4)高山市教育委員会 1978『ツルネ遺跡発掘調査報告書』

5)岐阜県文化財保護センター2020『中切上野１号古墳』

6)岐阜県文化財保護センター2020「３発掘調査　中切日焼遺跡」『令和元年度年報』

7)弥生時代後期は野内遺跡Ｄ地区で竪穴建物が１軒、弥生時代終末期は野内遺跡Ｂ地区で３軒、Ｃ地区で２軒、古墳時代初めは赤保木遺跡で２軒を確認した（時期区分は本報告に合わせて記載）。
岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『赤保木遺跡』
岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『野内遺跡Ｂ地区』
岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『野内遺跡Ｄ地区』
岐阜県文化財保護センター2012『野内遺跡Ｃ地区』

8)上枝村史編纂委員会 2000「第２章　第１節先史時代」『上枝村史』

第３節　土地利用の変遷について

今回の発掘調査では縄文時代から古代までの遺構・遺物を確認した。本稿では、平成８年度に高山市教育委員会によって行われた発掘調査の成果を含めて、各時代の土地利用の変遷について説明する。

縄文時代は本章第１節で示したとおり、早期後半は墓域、前期中葉から断続的に中期後葉にかけて居住域や墓域として利用される。

弥生時代から古墳時代は弥生時代中期中葉の土坑墓（ST15）、古墳時代初頭の中切上野５号古墳や方形周溝墓（SZ１）、古墳時代後期の鉄刀が出土した土坑墓（ST29）を確認したが集落に関連する遺構は検出されなかったことから、丘陵上は主に墓域として利用されたと考えられる。特に古墳時代初頭は、本節第２節で示したとおり、丘陵の尾根筋に墳墓群が形成されたと考えられる。

古代は高山市発掘区で７世紀末の竪穴建物（SB１）、センター発掘区で 10～11 世紀の土坑群を確認した。丘陵下の中切日焼遺跡[1)]では、これらに近い時期の遺構を検出しており、この地に居住した人々が何らかの目的で丘陵上も利用した可能性がある。

注

1）岐阜県文化財保護センター2020「３発掘調査　中切日焼遺跡」『令和元年度年報』岐阜県文化財保護センター年報 20

図 385　弥生時代から古代の遺構

引用・参考文献

愛知県史編さん委員会 2015『愛知県史　別編　古代　猿投系』、愛知県
赤塚次郎 2005「第１章第３節　時期区分」『愛知県史　資料編３　考古３　古墳』、愛知県
我孫子昭二 1988「勝坂式土器様式」『縄文土器大観　第２巻　中期Ⅰ』、小学館
網谷克彦 1989「北白川下層式土器様式」『縄文土器大観　第１巻　草創期　早期　前期』、小学館
網谷克彦 1994「北白川下層式土器」『縄文文化の研究』３縄文土器１、雄山閣
石川日出志 1995「飛騨の弥生中期横羽状文甕」『飛騨と考古学』、飛騨考古学会
泉拓良 2008「鷹島式・船元式・里木Ⅱ式土器」『総覧　縄文土器』、株式会社アム・プロモーション
稲畑航平「山間部河川流域の集落景観－飛騨の縄文集落にみる「谷志向型」景観と「盆地志向型」景観」『東アジアの内海文化圏の景観史と環境　第１巻　水辺の多様性』、昭和堂
今福利恵 2008「勝坂式土器」『総覧　縄文土器』、株式会社アム・プロモーション
今村啓爾 1994「諸磯式土器」『縄文文化の研究』３縄文土器１、雄山閣
岩田崇・大石崇史 2003『関西縄文時代の集落・墓地と生業』、六一書房
岩田崇 2009「飛騨における中期中葉から後葉にかけての様相」『飛騨地方における縄文時代中期中葉から後葉の諸様相』、東海縄文研究会
植田真 1988「貉沢式土器様式」『縄文土器大観　第２巻　中期Ⅰ』、小学館
上峰篤史 2018『縄文石器　その視角と方法』、京都大学出版会
上峰篤史 2020「縄文前期石器群の様相と論点」『三重県における縄文時代前期後葉の諸様相』、東海縄文研究会
内堀信雄 1985「第４章　遺物１（石器）」『御望遺跡』（市道西郷１号線建設に係る緊急発掘調査の記録）、岐阜市教育委員会
大石崇史 2016「第１節　縄文時代前期ってどんな時代」『高山市史　先史時代から古代遍（上）』、高山市教育委員会
長田友也 2011「第３節　水汲遺跡の位置づけ　Ｂ.埋設土器」『水汲遺跡』、豊田市教育委員会
長田友也 2012「東海地方における峰一合遺跡」『縄文・峰一合遺跡の再検討』、下呂市教育委員会・下呂ふるさと歴史記念館
加藤三千雄 2008「新保・新崎式土器」『総覧　縄文土器』、株式会社アム・プロモーション
金三津道子 2015「第Ⅳ章総括　１平岡遺跡の集落構造」『平岡遺跡』、公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
上条信彦 2007『なりわい　食糧生産の研究』、同成社
上条信彦 2015『縄文時代における脱穀・粉砕技術の研究』、六一書房
関西縄文文化研究会 2003『縄文時代の石器Ⅱ－関西の縄文前期・中期』
関西縄文文化研究会 2003『縄文時代の石器Ⅲ－関西の縄文後期・晩期』
岐阜県文化財保護センター2000『上原遺跡Ⅱ』（岐阜県文化財保護センター調査報告書第 54 集）
岐阜県文化財保護センター2012『野内遺跡Ｃ地区』（岐阜県文化財保護センター調査報告書第 122 集）
岐阜県文化財保護センター2017『平成 29 年度中切上野遺跡現地見学会資料』
岐阜県文化財保護センター2018『平成 30 年度中切上野遺跡現地見学会資料』

岐阜県文化財保護センター2020『御望Ａ遺跡』（岐阜県文化財保護センター調査報告書第 144 集）
岐阜県文化財保護センター2021『上切寺尾古墳群・日焼遺跡』（岐阜県文化財保護センター調査報告書第 154 集）
岐阜県文化財保護センター2020「３発掘調査　中切日焼遺跡」『令和元年度年報』
岐阜県文化財保護センター2022『中切上野１号古墳』（岐阜県文化財保護センター調査報告書第 157 集）
櫛原功一 2008「曽利式土器」『総覧縄文土器』、株式会社アム・プロモーション
河野典夫 1988「第５章第１節　縄文土器」『落合五郎遺跡発掘調査報告書』、中津川市教育委員会
纐纈茂・髙橋健太郎 2008「中冨式・神明式土器」『総覧縄文土器』、株式会社アム・プロモーション
小杉康 1995「文化制度としての模倣製作」『飛彈と考古学　飛騨考古学会 20 周年記念誌』、飛騨考古学会
小林康男 1995「組成論」『縄文文化の研究７　道具と技術』、雄山閣出版株式会社
財団法人岐阜文化財保護センター1997『西田遺跡』（岐阜県文化財保護センター調査報告書第 29 集）
財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2005『上岩野遺跡』（岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書第 90 集）
財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2006『西ヶ洞廃寺跡・中野山越遺跡・中野大洞平遺跡・大洞平５号古墳』（岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書第 98 集）
財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『赤保木遺跡』（岐阜県文化財保護センター調査報告書　第 105 集）
財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『中野大洞平遺跡Ⅱ』（岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書第 107 集）
財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『野内遺跡Ｄ地区』（岐阜県文化財保護センター調査報告書第 108 集）
財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『野内遺跡Ｂ地区』（岐阜県文化財保護センター調査報告書第 111 集）
坂祝町教育委員会 1988『芦戸遺跡」
佐藤亮太 2020「芦戸式の成立と展開」『地域考古学５号』
塩屋雅夫・大野政雄 1960『村山遺跡』
下平博行 2008「神ノ木式・有尾式土器」『総覧　縄文土器』、株式会社アム・プロモーション
縄文セミナーの会 2010『縄文前期浅鉢土器の諸様相』
縄文セミナーの会 2016『縄文前期後半の型式間交渉の諸問題』
縄文セミナーの会 2017『縄文前期中葉の型式間交渉の諸問題』
白川村教育委員会 1983『島中通遺跡発掘調査報告書』
鈴木康二 2008「北白川下層式土器」『総覧　縄文土器』、株式会社アム・プロモーション
関根慎二 2008「諸磯式土器」『総覧　縄文土器』、株式会社アム・プロモーション
大工原豊・長田友也・建石徹 2020「縄文石器提要」、ニューサイエンス社
髙橋浩二 2000「古墳出現期における越中の土器様相―弥生時代後期から古墳時代前期前半土器の編年

的位置付け」『庄内式土器研究』ＸＸⅡ、庄内式土器研究会
高山市教育委員会 1995「１　赤保木５号古墳」『高山市内遺跡発掘調査報告書』
高山市教育委員会 2005「４　赤保木８号古窯跡」『高山市内遺跡発掘調査報告書』
高山市教育委員会 1978『ツルネ遺跡発掘調査報告書』
高山市教育委員会 1982『向畑遺跡発掘調査報告書』
高山市教育委員会 1991『垣内遺跡発掘調査報告書』
高山市教育委員会 1993『前平山稜遺跡　赤保木遺跡発掘調査報告書』
高山市教育委員会 1998『中切上野遺跡発掘調査報告書』
高山市教育委員会 2001「４　飛騨国分寺跡」『高山市内遺跡発掘調査報告書』
谷口康浩 1989「諸磯式土器様式」『縄文土器大観　第１巻　草創期　早期　前期』、小学館
谷口康浩 1986「縄文時代「集石遺構」に関する試論」『東京考古４』、東京考古談話会
東海縄文研究会 2014『飛騨地域における縄文時代前期後葉の諸様相』
戸田哲也 1997『堂之上遺跡　縄文時代集落跡の調査記録』、久々野町教育委員会
戸田哲也 2001「岐阜県における縄文時代集落の諸様相」『列島における縄文時代集落の諸様相』、縄文文化研究会
戸田哲也・綿田弘実・前山精明『シリーズ縄文集落の多様性Ⅲ　生活・生業』「Ⅳ　北陸・中央高地の縄文集落の生活と生業」、雄山閣
豊島直博 2010『鉄製武器の流通と初期国家形成』（奈良文化財研究所学報第 83 冊）、独立行政法人国立文化財機関奈良文化財研究所
長澤有史 2011「水汲遺跡出土石器群の石器組成について」第２節『水汲遺跡　第２・３・５・６次調査』、豊田市教育委員会
長屋幸二 2003「東海・関西地域における打製石斧の選択」『縄文時代の石器Ⅱ－関西の縄文前・中期』、関西縄文研究会
長谷川豊「飛騨における縄文時代中期後葉の竪穴建物址について」『飛彈と考古学　飛騨考古学会 20 周年記念誌』、飛騨考古学会
長谷川豊「縄文時代中期後葉に建築された垣内型住居の再検討」『斐太紀』第 27 号、飛騨考古学会
馬場伸一郎 2012「縄文時代前期後半飛騨を中心とした地域間交流」『縄文・峰一合遺跡の再検討』、下呂市教育委員会・下呂ふるさと歴史記念館
古川町教育委員会 1991『上町遺跡Ｄ地点発掘調査報告書』
上枝村史編纂委員会 2000「第２章　第１節先史時代」『上枝村史』
堀沢祐一 2003「富山県内の縄文時代竪穴住居について　～前期から中期にかけて～」『富山県北押川Ｃ遺跡発掘調査報告書』、富山市教育委員会
末木健 1988「曽利式土器様式」『縄文土器大観　第３巻　中期Ⅱ』、小学館
増子康眞 1976「名古屋市鳴海町鉾ノ木貝塚の研究－縄文前前半の編年を中心として－」『古代人』第 32 号、名古屋考古学会
増子康眞 1976「北白川下層Ⅱａ式・Ⅲ式併行の東海地方西部の土器」『古代人』第 32 号、名古屋考古学会

増子康眞 1982「北白川下層式土器の再検討」『考古学研究』第 29 巻第 1 号、考古学研究会
増子康眞 1996「縄文前期後半・大麦多式土器の再検討－岐阜県御望遺跡・市場遺跡の再検討－」『古代人』第 57 号、名古屋考古学会
増子康眞 1997「東海地方西部における縄文時代前期中葉土器群の成立過程」『縄文時代』第 8 号、縄文時代文化研究会
町田尚美 2013「富山市平岡遺跡の掘立柱建物について　－縄文時代前期後半の集落の様相」『富山県考古学研究第 16 号』、公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
松田光太郎 2020『縄文前期の広域土器編年とその展望』、六一書房
三上徹也 1988「唐草文系土器様式」『縄文土器大観　第 3 巻　中期Ⅱ』、小学館
三島誠 2017「飛騨地域における縄文時代前期中葉から後葉の竪穴建物について」『岐阜県文化財保護センター研究紀要』第 3 号
山下勝利 2008「清水ノ上Ⅱ式・上の坊式土器」『総覧　縄文土器』、株式会社アム・プロモーション
山下勝利 2008「東海条痕文系土器」『総覧　縄文土器』、株式会社アム・プロモーション
吉川金利 2008「唐草文系土器」『総覧　縄文土器』、株式会社アム・プロモーション
渡邉博人 2008「美濃須恵窯について」『日本考古学 2008 愛知県大会研究発表資料集』、日本考古学協会 2008 年度愛知大会実行委員会
渡辺誠・斉藤基生ほか 1985『阿曽田遺跡発掘調査報告書－阿木川ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－』、中津川教育委員会

図版１　発掘区近景

平成 29 年度発掘区近景（北西から）

平成 29 年度発掘区近景（上が南）

図版２　発掘区近景

平成 30 年度発掘区　第１調査面近景（東から）

平成 30 年度発掘区　第１調査面近景（上が西）

図版３　発掘区近景

平成 30 年度発掘区 第２調査面近景（東から）

平成 30 年度発掘区 第２調査面近景（上が北）

図版４　縄文時代早期の遺構・縄文時代前期の遺構（１）

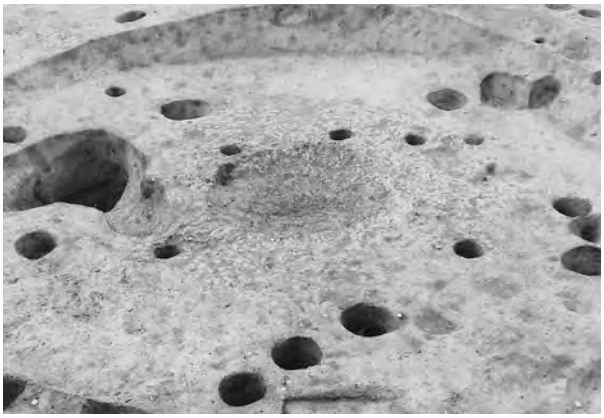
ST33　遺物（１）出土状況（東から）

SI１　完掘状況（東から）

SI２　完掘状況（東から）

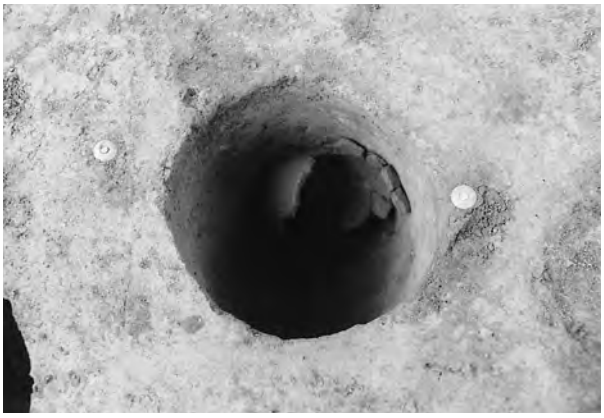
SI３　完掘状況（東から）

SI３　遺物（23）出土状況（東から）



SI４　完掘状況（東から）

SI４－炉　完掘状況（東から）



SI４-P７　遺物（56）出土状況（東から）

SI５　完掘状況（東から）

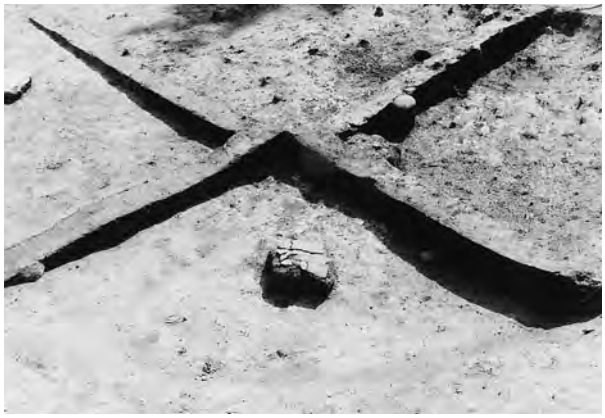
SI６　完掘状況（東から）

SI７　完掘状況（東から）

SI８　完掘状況（南から）

SI９　完掘状況（南から）

SI10　完掘状況（南東から）



SI10　遺物（124・125）出土状況（南から）

SI11　床面１検出遺構完掘状況（南から）

図版６　縄文時代前期の遺構（３）

SI11　床面２検出遺構完掘状況（南から）

SI11　遺物（138・139）出土状況（南から）

SI12　完掘状況（東から）

SI12-炉　完掘状況（南から）

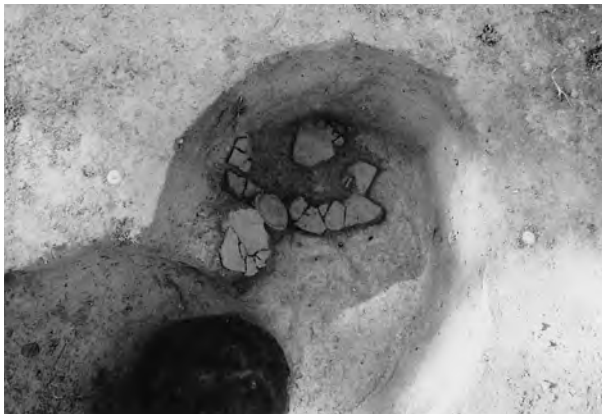
SI13　完掘状況（北から）

SI14　完掘状況（南から）

SI14-炉　焼土検出状況（南から）

SI15　完掘状況（南から）

SI15-炉　焼土検出状況（南から）

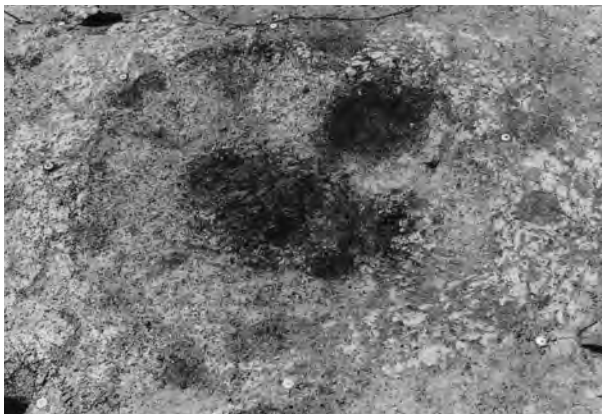


SI15-P48　遺物（240・241・243）出土状況（南から）

SI16　完掘状況（南から）

SI16-炉　完掘状況（南から）

SI17　完掘状況（南から）



SI17-炉　完掘状況（南から）

SI17　遺物（272）出土状況（西から）

SI17　遺物（284）出土状況（東から）

図版８　縄文時代前期の遺構（５）

SI17　遺物（300）出土状況（南から）

SI21（平成 29 年度調査）　完掘状況（東から）

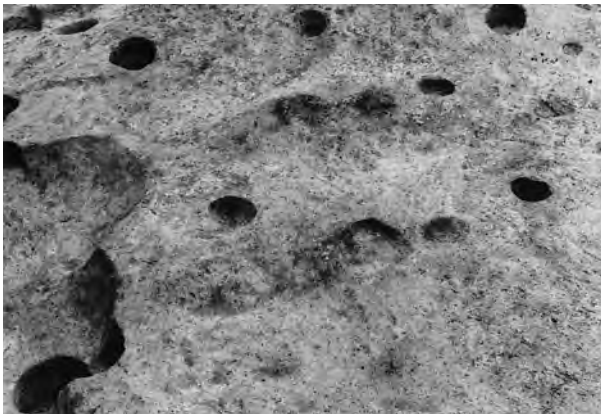
SI21（平成 30 年度調査）　完掘状況（南から）

SI21　遺物（306）出土状況（東から）

SI22（平成 29 年度調査）　完掘状況（北東から）

SI22（平成 30 年度調査）　完掘状況（南東から）

SI23（平成 29 年度調査）　完掘状況（北東から）



SI23（平成 30 年度調査）　完掘状況（南東から）

SI24　完掘状況（南東から）

SI28　完掘状況（東から）

SI28-炉　検出状況（南から）

SI30　完掘状況（南から）

SI31　完掘状況（南から）

SI36　完掘状況（東から）

SI40　完掘状況（南から）

SI40-炉　検出状況（南から）

図版 10　縄文時代前期の遺構（７）

SI42　完掘状況（北から）

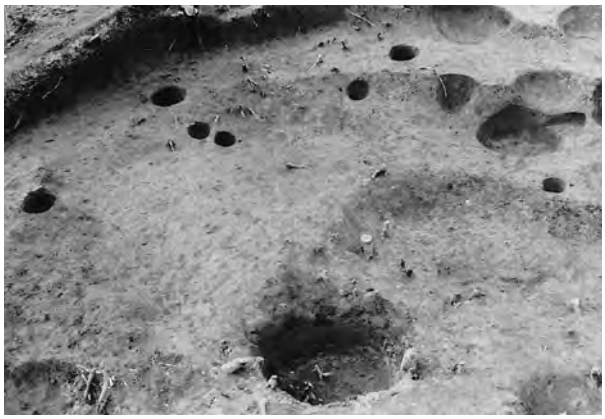
SI42- 炉１　完掘状況（東から）

SI42- 炉２　検出状況（西から）

SI43　完掘状況（南から）

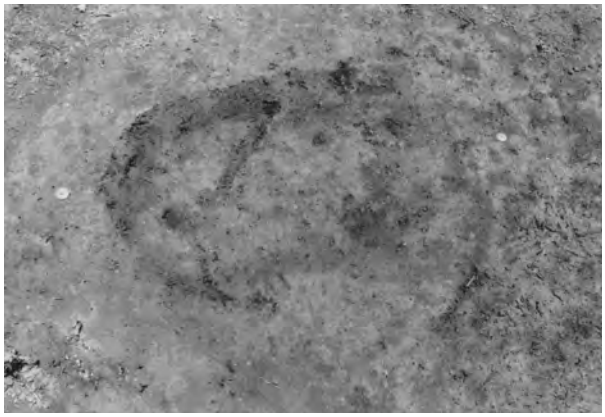
SI43- 炉　検出状況（南から）

SI44　完掘状況（東から）



SI45　完掘状況（南東から）

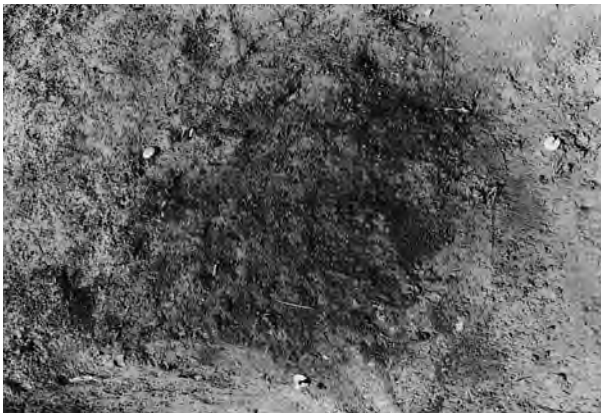
SI47　完掘状況（南から）



SI47- 炉　完掘状況（南から）

SI49　完掘状況（東から）

SI49- 炉１　検出状況（南から）

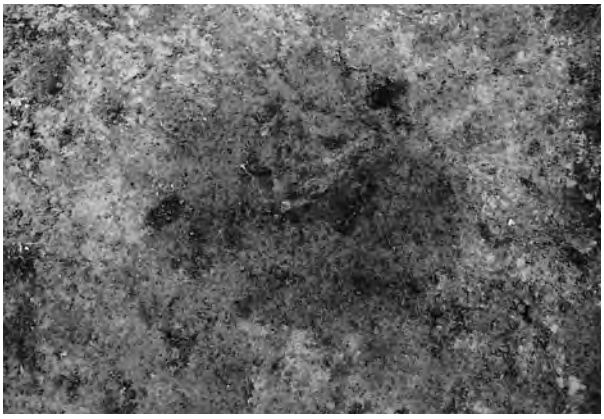


SI49- 炉２　検出状況（南から）

SI53　完掘状況（南東から）

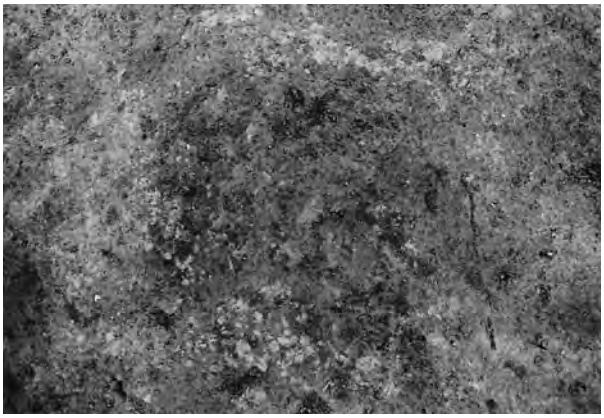
SI53- 炉　検出状況（南から）

SI54　完掘状況（東から）

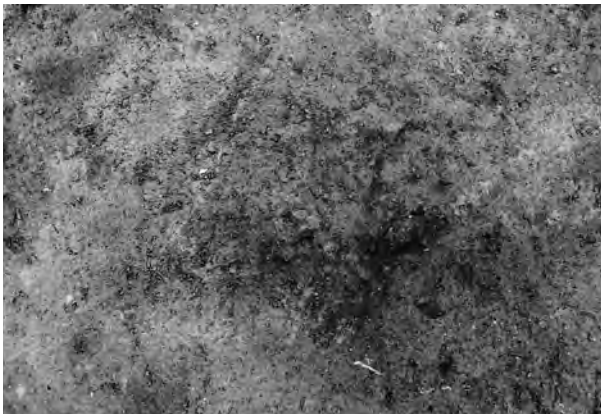


SI54- 炉１　検出状況（南から）

図版 12　縄文時代前期の遺構（９）



SI54- 炉２　検出状況（南から）



SI54- 炉３　検出状況（南から）

SI54　遺物（414・415）出土状況（東から）

SI54　遺物（426）出土状況（西から）

SI54　遺物（438）出土状況（西から）

SI55　完掘状況（南東から）

SI55- 炉１　土層断面（北東から）

SI55- 炉２　土層断面（北から）

SJ２　遺物（446）出土状況（北から）

ST３　礫出土状況（東から）

ST５　遺物（461）出土状況（東から）

ST６　礫出土状況（東から）

ST８　礫出土状況（東から）

ST10　礫出土状況（東から）

ST16　礫出土状況（南から）

ST16　遺物（447・479・480）出土状況（南から）

図版 14　縄文時代前期の遺構 (11)

ST17　遺物（481・483）出土状況（南から）

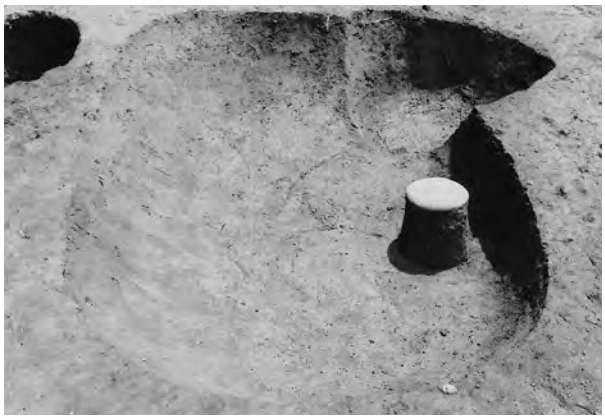
ST18 遺物（486・487・490・491）出土状況（北東から）

ST20　完掘状況（北から）

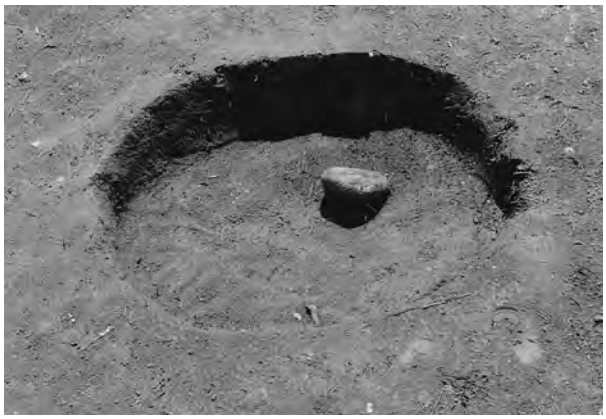
ST21　遺物（494 ～ 499）出土状況（東から）

ST23　完掘状況（南から）

ST23　遺物（500・502）出土状況（南東から）

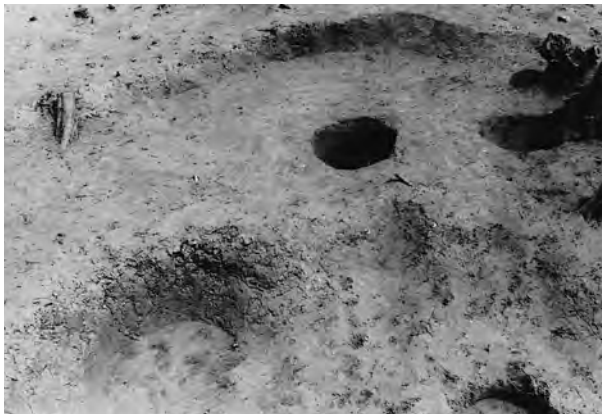


ST25　礫出土状況（南西から）



ST26　礫出土状況（東から）

ST27　礫・遺物（509）出土状況（南から）



ST28　完掘状況（南から）

ST30　礫出土状況（西から）

ST31　完掘状況（南東から）

ST38　遺物（518・519）出土状況（南東から）

ST39　礫出土状況（東から）

ST41　完掘状況（南から）

ST41　遺物（521）出土状況（北東から）

図版 16　縄文時代前期の遺構 (13)

ST42　完掘状況（南から）

ST42　遺物（522 ～ 525・528）出土状況（南東から）

ST44　土層断面（南東から）

ST45　礫・遺物（534）出土状況（南西から）

SK６　礫出土状況（西から）

SK７　礫出土状況（東から）

SK８　礫出土状況（北東から）

SK12　遺物（555）出土状況（北から）

SK18　礫出土状況（南から）

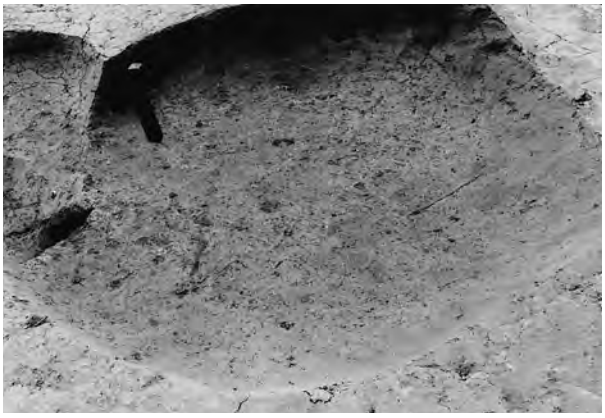
SK20　礫出土状況（南から）

SK24　礫出土状況（南から）

SK26　遺物出土状況（南から）

SK29　礫出土状況（南東から）

SK406　完掘状況（北西から）



SK426　完掘状況（東から）

SK428　完掘状況（南東から）

図版 18　縄文時代前期の遺構 (15)

SK491　礫出土状況（南東から）

SK521　完掘状況（南から）

SK524　礫出土状況（南から）

SK540　完掘状況（東から）

SK547　遺物（623）出土状況（東から）

SK559　完掘状況（東から）

SK570　完掘状況（南から）

SK572　礫出土状況（南から）

SK603　礫出土状況（北から）

SK672　完掘状況（西から）

SK684　完掘状況（南東から）

SK684　遺物（633）出土状況（南から）

SK684　遺物（634）出土状況（南から）

SK696　礫出土状況（西から）

SK698　完掘状況（南から）

SK720　完掘状況（南から）

図版 20　縄文時代中期の遺構（1）

SI18　完掘状況（南から）

SI19　完掘状況（南から）

SI19-炉　焼土検出状況（南から）

SI19　遺物（673）出土状況（北から）

SI19　遺物（676・677・679）出土状況（西から）

SI20　完掘状況（南から）

SI25　完掘状況（東から）

SI25-炉　完掘状況（東から）

SI26　完掘状況（東から）

SI27　完掘状況（東から）

SI27-炉　焼土検出状況（東から）

SI29　完掘状況（東から）

SI32　完掘状況（南東から）

SI32-炉　土層断面（南から）

SI32　遺物（700・701）出土状況（東から）

SI33　完掘状況（南東から）

図版 22　縄文時代中期の遺構（３）

SI33　炭化材検出状況（北東から）

SI33　遺物（730）出土状況（南から）

SI33　遺物（731）出土状況（南から）

SI34　完掘状況（東から）

SI35　完掘状況（東から）

SI35-炉　検出状況（東から）

SI35　遺物（738）出土状況（北から）

SI35　遺物（741）出土状況（北から）

SI37　完掘状況（東から）

SI38　完掘状況（東から）

SI39　完掘状況（東から）

SI41　完掘状況（南から）

SI41-炉　検出状況（南から）

SI46　完掘状況（東から）

SI46-炉　検出状況（南から）

SI48　完掘状況（南西から）

図版 24　縄文時代中期の遺構（５）

SI48- 炉　完掘状況（南から）

SI48　遺物（789）出土状況（西から）

SI48　遺物（790）出土状況（東から）

SI48　遺物（801）出土状況（北から）

SI48　遺物（803・804・817）出土状況（東から）

SI50　完掘状況（南東から）

SI50- 炉１　検出状況（南から）

SI50- 炉２　検出状況（南から）

SI50- 炉３　検出状況（南東から）

SI51　完掘状況（南から）

SI51- 炉１　検出状況（南から）

SI51- 炉２　検出状況（南から）

SI51- 炉３　土層断面（南東から）

SI52　完掘状況（南から）

SI52- 炉　完掘状況（南から）

SJ３　遺物（876・877）出土状況（西から）

図版 26　縄文時代中期の遺構（7）

SJ３　完掘状況（西から）

ST13　礫出土状況（北から）

ST14　遺物（879）出土状況（南から）

ST19　完掘状況（東から）

ST22　完掘状況（南から）

ST22　礫出土状況（南から）

ST24　完掘状況（南から）

ST24　礫出土状況（南から）

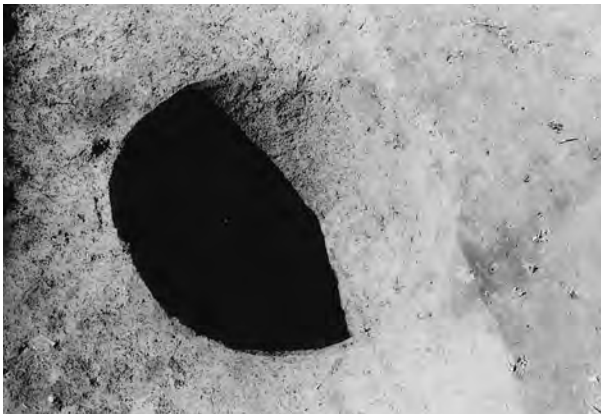
ST32　遺物（885・888・889）出土状況（南から）

ST34　礫出土状況（東から）

ST35　遺物（891 ～ 895）出土状況（東から）

ST36　礫出土状況（西から）

ST37　礫・遺物（898）出土状況（北から）



ST40　完掘状況（南から）

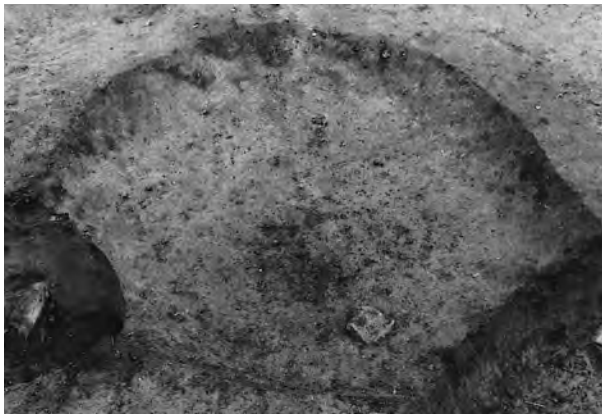
ST43　遺物（901 ～ 903）出土状況（東から）

SK582　礫出土状況（南から）

図版 28　縄文時代中期の遺構（９）

SK584　完掘状況（北から）

SK605　完掘状況（東から）

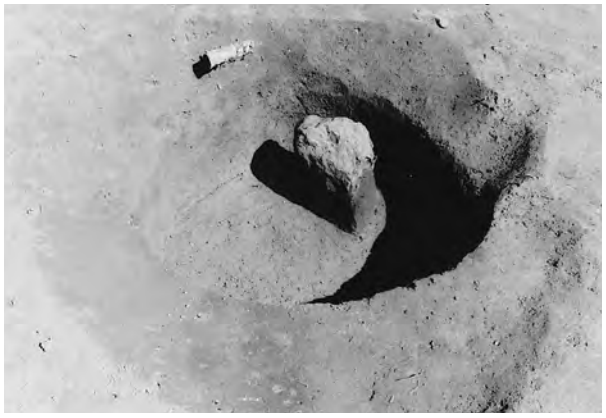


SK612　完掘状況（南から）

SK614　完掘状況（南から）

SK615　完掘状況（南から）

SK628　礫出土状況（南東から）



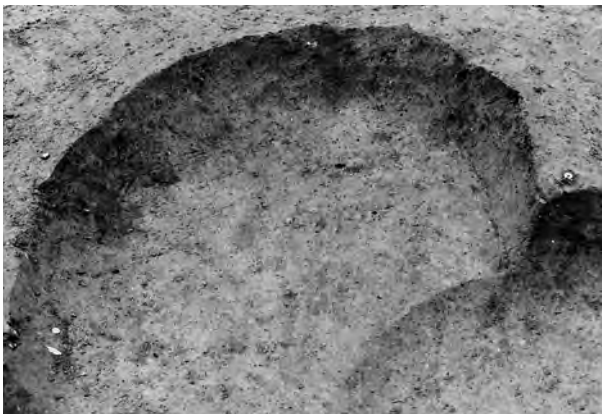
SK638　礫出土状況（南から）

SK642　完掘状況（南から）

SK675　完掘状況（南から）

SK701　完掘状況（南から）

SK705　完掘状況（西から）



SK717　完掘状況（南から）

SK718　完掘状況（南から）

SK719　完掘状況（南から）

ST15　遺物（945 ～ 947）出土状況（北から）

ST15　遺物（945 ～ 947）出土状況（西から）

図版 30　弥生時代以降の遺構（２）

SZ１-周溝　完掘状況（西から）

SZ１－主体部１　完掘状況（東から）

SZ１－主体部２　完掘状況（北から）

SZ１－周溝　遺物（948）出土状況（東から）

SZ２－周溝　完掘状況（南東から）

SZ２－主体部　完掘状況（東から）

ST29　遺物（952）出土状況（東から）

SK335　遺物（961）出土状況（東から）